目次

釋尊の降誕を慶讃して（其二）……日生上人
實在の根本原理（其三）……中村清一
人生と法華經（其二）……池ノ内三雄
法華經講話（第十七講）……小林一郎
記事
○矢野茂翁追悼會　○本部各地教報
○寄附團費誌料領收

第四十年　五月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

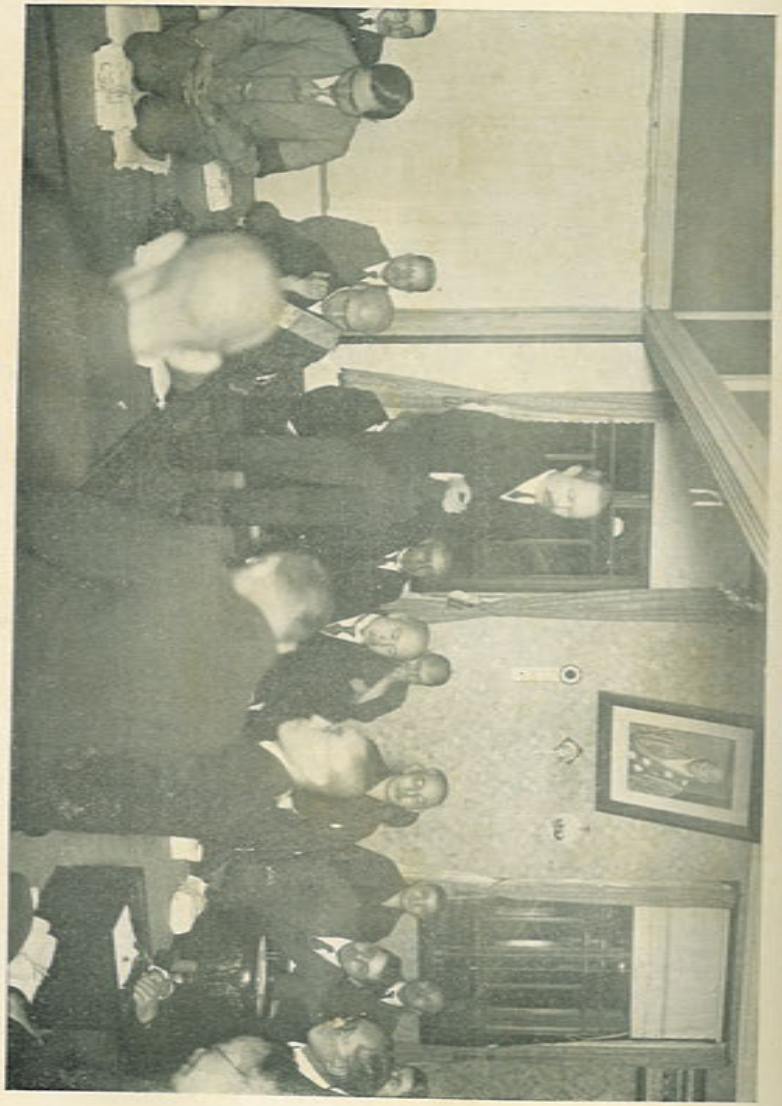
◎**維持員**　本團　事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎**賛助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ賛助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誘友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誘友トス



於 日蓮聖人誕生地 記念會場

釋尊の降誕を慶讃して（其二）

日生上人

三、釋尊降誕と文化

尙ほ能く考へて見ると曾に精神文明の事ばかりではない、東洋に於けるあらゆる藝術、繪畫に於ても彫刻に於ても、その他いろ〳〵の產業に於ても、佛敎を通じて皆發達を遂げたものである。日本の建築といふやうなものも、佛敎を通じて聖德太子がこれを日本に應用せられて、所謂推古式の文化と稱するものが出來た、法隆寺なり、或は天王寺なり、その他佛敎の建築を通じて日本建築といふものは進歩したのである。又佛敎の方から出た繪畫彫刻を通じて日本の美術といふものは發達したものである、そればかりではない、日本の民衆的藝術に屬するところの芝居のやうなものでも、淨瑠璃のやうなものでも本へ戻せば皆佛敎から出て居る。その他佛敎の敎化は人情の中に織込まれて、あらゆる事柄の中に文化の全面に亘つて偉大な影響を與へて來て居るものである。だから今でも何處か名所舊蹟を見物するといふことになれば、奈良に行つて奈良を見物すると言つても、皆お寺のやうなものである、京都に行つて見たところがやはりお寺が主なものである、寺でなくても佛敎に關係の無いものは殆どありはしない。

舊い時分の立派な物と言つたならば、繪畫、彫刻、文章、皆佛教的色彩を帶びて居るものである。左樣にして佛教が日本の文明を開發した功績は實に廣大なものであります。

尙ほ佛教に反對をした人でも、能く考へて見ればそれはたゞ何にも知らずに反對して居るだけのものである。それ等の人の言ひ居る善い事柄は、皆その儘佛教の教へであると言つても宜いのである。例へば支那に於ては王陽明といふ人が非常に佛教の惡口を言つて居るけれども、陽明が一生懸命に主張をして居るところの誠心とか、良知良能とか、知行合一とかいふやうなことは、これ皆佛教が本から教へて居る事である、陽明學に善い所があるとするならば、それが佛教の趣意と少しも異なるものではない、『賊を認めて子と爲す』煩惱の方を子と思つて佛性の方を忘れて居るといふやうな事を盛に言うて居るが、それは皆佛教の中に教へて居る事である。恐らくは陽明も佛教の意味合を以て、たゞ表面だけ佛教を攻擊して居つたものであると思ふ。それは陽明は三十年も佛教を學んで居つたけれども、當時の坊主は喧嘩をしたり、坊主があまりに腐敗して居るといふので佛教の惡口を言ひ出したので、その教の善い所だけ採つて用ひようといふ考は有たなかつたとは言へないのである。

さういふ事實は澤山あるので、日本の排佛者でも能く考へて見ると、やはり佛教の善い所を捨てることは出來ない。近代の英傑と謂はれる吉田松蔭先生もなか〳〵排佛家である、御維新の時分の勤王の志士は大抵排佛の色彩を帶びて居つたけれども、併し松蔭全集といふものを讀んで見たならば松蔭が牢に入つて居る時分に妹さんが法華經の事を言うて送つて居る、法華經を信心なさつたらあなたもさう苦しむやうな事もないでせうといふやうな事を手紙で書き送つた時分に、松蔭先生は『お前は人間は出世をしなければならぬと思つて居るやうだけれども、佛教で言ふ出世といふのは、そんな世間で名譽を擧げたりするやうな事ではない、本當の出世といふことは世間のくだらない事を脫却して更に偉大なる解脫の地歩を占める事であつて、それは吾々の志と一致するものである』といふことを手紙に書いて居るのである。さうして平生は坊主の惡口を盛に言うて居つたところが、同じ牢の內に法華宗の坊主か何かゞ入つて居つた、これは相當えらい坊主であつたが、放蕩か何かして女を騙した爲に牢へ入れられて居る或る點は犯罪を構成したけれども全然惡い坊主ではない、なか〳〵學問も出來る人であつた、そこで他の者は話相手にならぬけれども、その坊主だけは話が出來るといふので、松蔭先生が獄中でいろ〳〵の話をして非常にそれに感心して居る。その事は松陰先生が高杉普作に送つた手紙を見てもその坊さんの事が書いてある。『いろ〳〵議論して見ても、腐つた儒者などと比べたならばズツト氣が利いて居る、國體論をやつても、聖賢の學を講じても、今まで坊主といふものはつまらぬ者だと思つて居つたが、これはなか〳〵偉いものだ、自分の考が間違つて居つた、その他にもいろ〳〵世話になつたから、その坊さんが赦免になつて出たならば君は僕の代りに禮に行つて呉れ』といふ手紙を送つて居る。松陰先生の如き人でも、今までは自分の考が間違つて居つた、何にも知らないで坊主の惡口ばかり言つて居つたが

會つて見るとなか〳〵親切であり、物がわかつて居るといふので感心して居る。さういふ例は澤山ある、だから佛教に反對すると言つたところが、何もその反對がそれほど條理の通つて居るものではない。

支那の張商英といふ人が佛教の惡口ばかり言うて居つた、そこで奥さんが『あなたはそんなに佛教がお嫌ひならばモット徹底的に佛教を粉碎したら宜いではありませぬか、たゞ曖昧に佛教の惡口を少しばかり言はれても、そんな事でなか〳〵佛教が弱るものではない、本格に攻擊なさつたら宜いではありませぬか』と言つたので、それは宜からうといふことになつて、それから佛教を大に攻擊するつもりで一生懸命に佛教の研究に取掛つた。暫して一冊の本を書いてサア出來たと言つて奥さんに見せたところがそれは佛教を攻擊する書物ではなかつた、破佛論ではなくして『護法論』と書いてある、佛教は護らなければならぬ大事なものであると言ふ、奥さんは吃驚して『これは何ですか、あなたは佛教を攻擊すると言つて居ながら護法論を書くといふのはどういふ譯ですか、』『イヤ能く佛教を調べて見たところが實に立派なものである、俺は何も知らずに惡口を言ひ居つたので、調べて見て感心してしまつた』と言つた、これが全く世の破佛家を代表して居るものである。日本の今までの學者でも、佛教を攻擊するのならばモット徹底的にやれと言つてやりかけたならば、必ず破佛論より護法論に變るのである。今の政治家今の教育者、今の學者の中でも、たゞ表面で惡口を言うて居るが、惡口を徹底しようとすれば、却つて佛教に降伏するより外ないのである。大體の破佛論といふものは、佛教が日本の國體を傷つけるとか、日本の發展の爲に害があるとか言つて反對をするのであるけれども、能く調べて見たならば本當に日本の國を護立て、永遠に日本の隱れたる礎となるべきものは佛教であるといふことが明かになるのである。

さういふ譯であるから佛教に反對した者でも、モウ少し近寄つて釋尊の教を聽いたならば、彼等は必ずや皆合掌禮拜すべきものである。それ故に佛教に反對する人間だからと言つて釋尊は勿論これをお憎しみになりはしないが、吾々佛教徒も何もこれを憎む必要はない。阿闍世王が釋尊を殺さなければ已まぬと言つて隨分反對したけれども、遂には釋尊の前に拜跪して涙を流して『そんな有難い方でございましたか』と言つて禮拜合掌したのである。又大薩遮といふのは婆羅門の非常な學者であり、人物であつたが、釋尊に反對して『この頃釋迦といふ新米が出て來て吾等の祖先以來の婆羅門の教を攻擊するナンといふのは生意氣な奴だ、俺が行つて一擊を加へてやる』といふので、大薩遮は釋尊の所にやつて來て問答を始めた、これなら弱るだらうと思つたところが少しも弱らない、却つて反對に大薩遮がスッカリやられてしまつて、一遍に降參して釋尊のお弟子になつてしまつたのである。大抵佛弟子の中の偉い者は、阿難でも目連でも迦葉でも皆婆羅門の方に於て一方の隊長であつた、五百人、千人の弟子を有つて居るところの當時の宗教家である、だからいきなり釋尊に頭を低げたものではない、一つ俺が行つてやつつけてやらうと思つて行くと、反對に返討になつてお弟子になつたのである。そこで感心しても後で又嘘を言ふといかぬから、感心したところで頭を剃れといふことを釋尊はやつた、これは非常なうまい

方法で頭を剃つてしまへば今度嘘を吐かうと思つても間に合はない、『よし、お前は俺の教に感心したら頭を剃れ……』翌日になつて頭を擦いても追付かない。左様な譯で反對した者でも遂に釋尊の教化に服して居る、提婆達多も遂に釋尊に依つて救はれ、央掘摩も釋尊に依つて救はれたが如くに、その教に感心して居る者が多大な御利益を受けて居るのは謂ふまでもないけれども、反對して居る者も最後釋尊に依つて救はれるのである。今や全世界の釋尊の教に來らざる者、他の教に依り、他の思想に依つて反抗して居る者も、往いては皆釋尊の教化の下に拜跪合掌するの日があることを吾輩は信ずるのであります。

（次　續）

釋迦如來は一代聖教乃至八萬法藏の說者なり、此娑婆無佛の世の最先に出させ給ふて一切衆生の眼目を開き給ふ御佛なり。東西十方の諸佛菩薩も皆此佛の敎なるべし。譬へば皇帝已前は人父をしらずして畜生の如し、堯王已前は四季を辨へず牛馬の寢なるに同じかりき。佛世に出させ給はざりしには比丘比丘尼の二衆なく只男女二人にて候き。

—日蓮聖人善無長抄—

實在の根本原理（その三）

中村清一

日蓮主義の實在觀（つゞき）

第二には十界事常住の問題であるが、元來實在といふことゝ常住といふことゝは同一の眞理の兩面をあらはすものともいふべきであつて、實在ならぬ常住もなく、常住ならぬ實在もない。カントは、經驗は事物がかくの如くであるといふことを敎へるが、かくの如くでなければならぬといふことを敎へることは出來ないといつたが、單に經驗上存在するといふだけではそれが常住であるといふことは論證されない。抑々佛敎は常住を求めて實在に達せんとするものである。殊に法華經は現實に吾等が經驗する世界そのものゝ相を常住としようとするのであるから

この現象界の一切の內容はその根柢たる眞如實相の中に盡く含まれて居らぬはならぬ。一切の現象は實相に根柢を有する限り、その現象としての相そのまゝ常住であるといふのである。是を「是法住法位世間相常住」といふ。

いまこれを十界互具の立場から考へて見るに、抑も吾々の生命の本体が十界の何れにもなり得るものであり、而もかくの如き本質が宇宙に生存する無邊の衆生に共通してゐるものであるとすれば、現實の宇宙には常にかくの如き十法界の全体が存在してゐなければならぬ。（是は數學上からも證明出來ることである）又吾等の生命の本質と現實に存在する全世界とが根

本的に一つのものであるべき以上この現實世界は常に吾等の本性に含まるゝ十法界の一切を事實に具現してゐなければならぬのである。而して凡そ常住といふことは單に未來に向つての常住のみならず、未來に常住たらんとすれば過去に於ても亦無始の常住でなければならぬ、「本無今有已有還無」の如き半面的常住は實相と合致せず、又實在の法則にも一致しないから存在することは出來ないのである。かくの如く實相論と常住論とは最も密接な關係に立つのである。

さてこゝに、一口に十界互具といつてもその意味に於て非常に異なつた二つの內容が含まれてゐることに着眼することが必要となる。即ち一つは十界の各界に單に潛在的に他の九界を具有し折にふれ業に隨つて一つ〳〵實現して行く意味の十界互具でありこの点からいつて二乘作佛や十界事常住の必要なる所以は既に示した如くである。しかしこの意味だけの互具ならばあへて互具の名を必要としない。單に十界各衆生の本質上の平等を論ずれば足りるであらう。もう一つの互具といふのは自己の一念の中に現實に、現實の十界の全部を具有してゐて、眞に一衆生即十衆生の關係が成立してゐる意味の互具である。この意味の互具論からいつて十界事常の必要なる所以も直ちに明かである。即ちこの場合には一界に十界を具するといふそのことが、既に現實の客觀界に十界が存在することを意味してゐるのである。

さて第二の意味の互具を知ることは所謂難信難解の法門である。台家では色心不二、依正不二、自他不二等といつて、吾等のこの現實の心がそのまゝ客觀の全法界に擴がれる普遍的實在であることを明かにしてゐるのであるが、その場合單にこの心の外延が法界の全体と同一の廣さを有するといふばかりでなく現實の十法界三千世間そのものが吾等の一念の

內面にそのまゝ收められてゐるといふのでなければ一念三千の名に値しないこと勿論である。又十法界の全部を收めてゐるからといつて、それが吾々の現實の刹那の一念を離れて行つて、單に事實上全宇宙と一つである所の絕對我、普遍心、大心、若しくは佛の菩提の一念等であるといふことになつては、折角の一念三千も眞の力がなく、これは台家の正統派に於て最も嫌ふ所である。そこで、この問題は素直に信得すれば何でもないことであるが、學者を以て任ずる人達は何とかして之をよりよく分らうとしてそこに色々の理論を立てようとする。而もその理論が正しい方向のものであれば勿論それでよいのであるが、少しでも濁つた智解を交へるとそこから佛教の本義が傷けられ、自分も本門の正しい教義に達することが出來なくなる。兎も角、一方は十界中の一界、一界中の一衆生、而もその刹那の陰妄の一念であり他方は十法界の依正一切を含む全宇宙——この二つの同一を論ずるのであるからその智解はなかなか容易でない。一つの安つぽい妥協的な考として、この現實の刹那心を迷の上にあるものとして、覺ればそれがそのまゝ全宇宙と一つなる普遍的大生命大人格としての「本佛」(これ本佛の意義を知らざるものなり)に他ならぬと考へる。否、吾々は始めより全宇宙と一つなる本佛そのものであるのを知らずしてかくの如く迷つてゐるものであると考へ、或は、この本佛そのものが分れて吾々各々の迷へる姿を現じてゐるが覺るときは又もとの本佛に歸るのであると考へる。かくの如く實体的にして遍滿的な本佛といふものを獨斷的に考へ、而も自分では之によつて天台の迹門觀より尙一歩進んだ本門の觀心が成立するものゝやうに考へるのである。起信論の不變眞如をそのまゝ實有的なものに改め、本佛を能緣起となし衆生を所緣起となすやうな考もこの系統の中に屬するのであらう。兎も角、かくの如き雜雜な考に陷ることなく

眞に現在刹那の一念に事實の十法界の全部を具してゐると、正直に考へなければならぬ。

それにしても現實にある十法界をそのまゝ吾等の一念の中に收めて考へることは却々困難なことであるから、それと全く同じなる世界（小宇宙）が吾等の一念の中に在ると考へたり、或は現實の十法界は己顯のものであり、吾人の本具の十法界は譬へば種子の中の樹といつたやうな未顯のまゝのものであつて、その未顯が己顯となることによつて事實上吾等が逼於法界の色心を實現するといふやうに、現實の十法界と本具の十法界とを何等かの意味に於て別々のものとして考へたがる。この樣に人によつて多少づゝ異なつた種々の妥協的な考があらうが、結局事實の十法界が事實に於てそのまゝ吾が一念の中に收まるといふことが了解されなければ、本當の事具の思想に達したとはいへない。

一つの比較的無難な考へ方は、吾々の念々はこの五尺の色身の中に限られたものでなく、天地宇宙の一切を皆吾が命とし色心とするやうな大きな生命に他ならぬと考へることである。即ち地獄に苦しむ衆生の叫び聲も靈山の法味に浴する四大聲聞の歡悅も皆吾が一念のはたらきに他ならぬと感得することである。この考はたしかに惡い考ではないが、たゞ現實の吾等の一念が未だこの境涯に達してゐない以上現實の世界が今直ちに自己の一念に收まつてゐるとは考へにくく、結局吾等が覺つてから後の現實世界だけが眞に吾が一念の中に入るといふことになつて一歩逆轉すれば單に潜在的可能的な意味の互具となり、或は佛の覺つた一念のみが實際に三千世間を具するといふかの別教に近い一念三千論に陷るであらう。又若し吾等の現在の一念が直ちに全宇宙の一切衆生の色心をその中に收めてゐるとするならば、吾等自身の一個の生命とこの逼滿的な大生命との關係が明かになつて來ないであらう。故にこの考は別に誤つてゐる所はないが、唯だそこに何となく解き切れない疑問が殘されてゐるといふべきである。而してこれは迹門以下の思想に於て通俗的に一念三千を考へてゐる限り、どのみち免れない所なのである。兎も角この問題については、信仰によつて直觀的に一念三千の氣分を了解しておくか然らずんば本門の根本知解によつて更に深く之を知るかの何れかであらう。しかし此の階段ではもはやこれ以上進むことが出來ないから、このまゝ次の問題に移つて行くことにする。

第三には本覺始覺の問題であるが、こゝから法華經本門の內容に入る。壽量品では釋尊の本地成道の時を過去無量無邊百千萬億那由佗劫の昔であるとなし、所謂五百塵點の譬喩を以て之を示されてゐる。凡そ佛敎で無量といふ場合に三つの意味があるそうである。第一は無限量の意味で數學でいふ無限大の如きもの、第二は無定量で大きさの定まらぬこと、第三は數名で或一つの非常に大きな數單位のことであらう。今この壽量品の無量無邊を單に非常に大きなある一定數（その數も吾々の普通の思惟では到底想像も出來ぬ位大きいものであるから、その實際上の結果に於ては數學上の無限大と變りはないのであるが）と解してゐる限りに於ては別段この本覺始覺論と關係を持つて來ないのであるが、之を以て又同時に純粹の無限大をあらはすものと解するならば、そこに當然本覺と始覺との關係が一種の前提となつてゐることを知るのである。（こゝに本覺始覺といふのは、最初に定義しておいた樣に、現在の成佛によつて無始の現實を證り出すことをいふのであつて、起信論などのそれとはやゝ意義を異にしてゐるのである。）而してこの本覺始覺の思想を所謂以生顯具の理に基いて本具の理に還元し、凡て覺によつて顯はさるゝ內容は本來衆生の心性の內に內面的に具せられてゐるものと考へる時、そこに本門の十界互具一念三千が顯現する。即

ち佛が始覺によつて無始の十法界を覺るといふのは佛の內面に無始の十法界を本來具有してゐるのでなければならず、又衆生がこの同じ十法界を覺ることが出來るといふのは、衆生の內面にも亦同じく無始の佛知見を具へ、從つて又無始の現實的なる十法界そのものを具してゐるのでなければならぬ。而してこれは單に潛在的本質的なる未顯の十法界にあらずして、過去より既に存在する已顯の現實的客觀的十法界を、而も現在一刹那の陰妄の一念に具してゐるのであるから、吾等の生命の內的本質は、實に——一刹那の現實の中にも無始無終の現實を具するといふ意味に於て——超時間的に全宇宙を統一し總攬するところの超時間的生命若しくは精神でなければならぬ。この大生命が即ち法身であり、實相であり、所謂九識心王であり、この大生命の具現が無始より無終に亘る十法界の全宇宙そのものに他ならぬ。而して吾等が成佛に際してこの超時間性の原理により一刹那に於て無始の佛法界（本果）と衆生界（本因）とを覺り出すことを本因本果俱時感得といふのである。又この原理が相對判に於て、一切經中ひとり壽量品に說ける本佛無始實在の論理的前提としてのみ現はれてゐることを「一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底に沈めたり」（この文を以て壽量品の顯本よりもより深いものが文底にあるといふ樣に解釋してはならないといひ、之に對し絕對判の立場からいつて、佛敎中の凡ての成佛理論の根柢が結局この一理に歸して一切經が悉く唯一の本門となることを「觀心の大敎起れば本迹爾前共に亡ず」（この場合にも觀心を本門以上と考へてはならぬ）といはれたのであらう。しかしこの原理としての一念三千は、壽量品の發迹顯本、即ち本佛實在の敎義に比すれば、尙一步下に位する敎義であることを知らねばならぬ。

第四は本佛實在の問題である。

右に述べた吾人の超時間的本性としての一念三千九識心王等は、天台大師に從へば、尙眞性軌若しくは正因佛性であつて、この上に觀照軌卽ち了因と、資成軌卽ち緣因との二つがあることを忘れてはならぬ。之を實在の見地より見るとき、この眞性軌は單に吾人の本体であり、宇宙の實相であるところの超時間的物心不二の絕對者であつて、衆生も佛も卽ち因も果も悉くその中に包含されてゐるものである。而してその中に（卽ち時間上に）現實の修行によつてこの本体を覺の上にあらはし無始の十法界を如實に知見し給ふ佛が存在し給ふとき之を觀照軌となすのである。前の眞性軌が法身如來であるに對してこの觀照軌は報身如來である。而して佛がこの覺の上に立つて現實に衆生を救ふ慈悲の活動をなし給ふとき之を資成軌となし應身如來となす。之を譬へば眞性軌は純白の長き布地の如く、觀照軌はその布地に施したる美しき圖案の染色であり、資成軌はこの布が適當に裁縫されて衣となつてゐる樣なものである。（更に後に述ぶる如來の功德力はその衣の中に入れた眞綿の如きものである）現實の衣服は常に布であるが、布は必ずしも衣服でないが如く法身如來だけでは單に佛となるべき本性を具へてゐるといふだけで未だ佛としての知慧も活動も存在しないのである。而して壽量品の本佛實在は單に眞性軌のみならず觀照軌及資成軌の上に現實のはたらきを有し給ふ三身即一の現實的佛陀の無始實在を論ずるものであるから、單なる原理としての一念三千よりは更に比較にならぬ程進んだ敎義であることを知らねばならぬ。開目鈔に涌出壽量二品以外の一切經の立場を論じて「法身の無始無終は說けども應身報身の顯本は說かれず」といはれたのは是であつて、この點は壽量品と他の經との絕對的差別に他ならぬ。「又諸經には始成正覺の旨を談じて三身相卽の無始の古佛を顯はさず」とか「今大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無

終なり、三身の無始無終に非す、法華經の五百塵點は諸大乘經に破せざる伽耶の始成之を破りたる五百塵點なり」等といふも同じ意味である。單なる理としての一念三千は華嚴宗眞言宗の學者の奸智によつて盜まれたが、この本佛の無始實在は壽量文上の明白なる教義であつて、之は斷じて盜むことは出來ない。

そこでこの壽量品の本佛實在あらはるゝ時、教相と觀心との双方に亘つて教義の上に一大飛躍、進展があつたのである。即ち觀心に於ては、開目鈔に

未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も現れず、二乘作佛も定まらず、水中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮べるに似たり。

本門に至つて始成正覺を破れば四教の果を破る四教の果を破れば四教の因破れぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破つて本門の十界の因果を說き顯はす。此れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はりて、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし。

といつて吾等の一念に無始の現實的本佛を具し、この本佛の內面に又無始の九法界を攝することゝなつたのである。即ちこれによつて、佛の無始實在と九界の無始實在とが互具によつて互に他を保證することゝなり、前の實相と諸法との關係に比して現實の十法界即ち生佛の實在性が一層確實にせられた次第である。

しからば、前に述べた涅槃と現實との一致による實在の立證と、こゝに云ふ本佛と吾等との互具による實在の立證との間に如何なる相異があるかといふに、前者は單に未顯の涅槃即ちこれから吾等が修行によつて覺り出す所の實在世界（理）とこの現實世界（事）との一致によつて、その涅槃の現實性と現實の實在性とを各々一面的に保證することに盡きてゐるのであるが、後者の場合に於ては涅槃の現實性即ち本佛の事常住といふことは既に壽量品の教義によつてこの現實即ち九界と全く同一の意味に於て立證せられてゐるのであつて、この現實的佛陀の知見によつて九界衆生の實在性を論證すると共に、この衆生の內面に本佛を具することによつて本佛そのものゝ實在性が又却つて論證せられる。即ち佛と衆生とは因果の關聯によつて互にその現實性を保證すると共に互具の關聯によつて更にその根本的實在性を論證してゐるのである。前の場合に於ては現實は能具となり涅槃は單に所具となつてゐる。能具は直接に現實性を有し、所具は單に能具を通じてのみ現實の經驗界と連つてゐる。之に反して後の場合に於ては現實（九界）と涅槃（佛界）とが直接に無始無終の現實性を有し、而も俱に能具として所具の實在性を保證してゐる。前者の場合若しも强いて涅槃を能具となすならば、それは單に理（超時間的眞如）の中に事（時間的現實）を具する意味の具であり、即ち事に理を具し、その理に更に事を具してゐるのである。是を理具の法門といふ。之に反して後者の場合には事（九界）と事（佛界）とが互に具し合つてゐるのであつて是を事具の法門といふ。事具の法門が壽量顯本によつて始めて成立するものであり、この事具が即ち九界の因と佛界の果との實在（本因本果）を完全に立證する原理であるといふことは、いま引いた開目鈔の文章に最も明瞭に記述せられてゐる。即ち若し本佛の現實的なる無始の實在性なしとすれば、九界衆生は能具としては單に理としての佛果即ち理の本覺を具ふるに止まり、所具としては自己の內面に具ふる理によつてのみその實在性を保證せらるゝに過ぎず、從つて無始以來の現實そのものゝ双關性の上に根柢を有せざる本無今有の非實在者となる。而して因、果の實在性とその双關性にして立證せられざる以上、一念三千も二乘作佛も恰も水中の月や根なし草の如

く現實の上に根柢を有せざる一種の非實在的抽象的なる原理に過ぎぬことゝなるのである。

本尊鈔に於ては單に壽量品の本佛が吾等の己心に具せられてゐる點だけを力說して、

吾等が己心の釋尊は五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛なり。

といひ、又これを三世間に約して、

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず未來にも生せず、所化以て同體なり。是即ち己心の三千具足三種の世間なり。

と述べられてある。

次に敎相の方は、かくの如く無始無終の實在性を有し給ふ本門の敎主釋尊が、同時に五百塵點劫乃至無始以來十方世界に身を現じて無限の活動をなし給ふことにより、釋尊は天月諸佛は水月とそこに本迹の關係に於ける能統一と所統一とが成立することを述べて、開目鈔の今の次の文に、

斯うて顧れば華嚴經の臺上十方阿含經の小釋迦方等般若金光明經阿彌陀經大日經等の權佛等はこの壽量品の佛の天月暫く影を大小の器に浮べ給ふ

といひ、又

此の過去常顯はるゝ時諸佛皆釋尊の分身なり。爾前迹門の時は諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛なり。かるが故に諸佛を本尊とする者釋尊等を下す。今華嚴の臺上方等般若大日經等の諸佛は皆釋尊の眷屬なり。

等といはれてゐる。而してこの敎觀二門に亘る二大敎義によつて本門壽量品の實在の本尊が完成し爾前諸宗の誤れる本尊觀は日輪の前の星の光の如くその輝を失ふことゝなるのである。

一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神の無からんが如くしてあるべきを、華嚴其言等の權宗の智者と思しき澄觀嘉祥慈恩弘法等の一往權宗の人々且は自らの依經を讃歎せんが爲に或は云く「華嚴經の敎主は報身、法華經は應身」と、或は云く「法華經壽量品の佛は無明の邊域、大日經の佛は明の分位」云々。雲は月を隱し、讒臣は賢人を隱す。云々（開目鈔）

この邪義を一擧に破らんがために、壽量顯本の大義、本佛の無始實在並に事の一念三千の法門によるその實在性の徹底的論證等々を一擧にたゝきつけてやらうと時機を待つて居られたのであるが、若しも彼等の徒が豫め之を知るならば惧をなして却つて公場對決に出て來なくなることを憂へられて、佐渡へ行かれるまではわざと之を一般的に御發表にならなかつたのであるが、龍ノ口法難以來この御考に多少の變化を來し、「我に付きたりし者共に實の事を云はざりけり」と不便に思召し、又「頸切らるゝならば日蓮が不思議留めん」との御決心より、開目鈔に於てこの本門壽量品の本尊の實在性を敎觀二門に亘つて徹底的に論證せられた次第である。

さて壽量品の釋尊はその體からいつて今の如き無始無終三身即一の本佛にてましますのであるが、同時にその現實的力用に於てもまた測り知ることの出來ぬ廣大なる神通力を具へ給ふのである。而してこの神力は單にその本體の遍滿性に基くといふのみでなく現實的には、その壽命の常住不滅なることゝ共に、寧ろ佛の積み給ひし非常に長き間の因果の功德力によるものであることを知らねばならぬ。又吾等から云つても、凡夫の心性に無始の本佛を具へてゐるといふことは、これは單なる正因佛性であつて未だ緣了の二佛性を意味するものではない。假令吾等の本覺の中に佛の無始活動をそのまゝ具してゐるとしても、之を現實に覺り出すには佛の智慧を藉らね

ばならず、又單に之を覺つたからといつて、實際に釋尊の如き廣大無邊の神通力と功德力とを具へんがためには、佛の積み給ひし因果の功德を實際に受領せねばならぬ。而してこの智慧と功德力とを吾等衆生に與へんがために、釋尊は妙法五字の中にその一切の知と五百塵點劫乃至それ以前より積み給ひし無限の功德とを籠めて吾等に授け給うたのである。（これ一に釋尊と吾等との五百塵點劫以來の因緣に基き佛尊の大慈悲によつて與へ給ふものであるから、吾等は何よりも先づ釋尊の大慈悲とその因緣關係に對して感謝を捧げねばならぬ。この點法華經は阿彌陀宗の如き居候的信心とは全く異なるのである。）その中でも智慧はまだ最上根の衆生が觀念觀法によつて磨き出すことを理論上絕對に不可能とはしないが、修行の功德力に至つては釋尊のそれを受得することによらずして僅かの間に之を得ることは絕對に不可能といふべきである。それ故に本尊鈔に於て、吾等の劣心に如何にして本門の教主釋尊の如き廣大無邊の功德力ある佛を具するか（具といへば必ず顯を思ひ、顯といへばそこに緣了の問題がある。）といふ疑問を掲げ、その最後の解決を、

釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふ。

と示し給うたのである。而してこの妙法五字を受持することにより自然に釋尊の功德を受取り妙覺の佛が實際に吾等の血肉となつてしまふことを、

妙覺の釋尊は我等が血肉なり、因果の功德は骨髓に非ずや、（本尊鈔）

といひ、又、多寶並に十方の諸佛は釋尊の分身に他ならぬ故に、

釋迦多寶十方の諸佛は我が佛界なり。其の跡を紹繼して其功德を受得す。（同鈔）

といはれたのである。即ちこれによつて、本門の觀心は單なる理としての觀心にはあらずして、寧ろ信念

そのものによる成佛の實際の確實性をあらはすものであることを知るのである。換言すればそれは單に心を觀ずることではなく、寧ろ吾等にはたらきかけ給ふ佛を觀ずることに歸するのである。こゝに觀心の問題は直ちに轉じて信仰上の本尊の問題となり、妙法五字の問題となつた次第である。――而してこの妙法五字のことは開目鈔に於ける本尊の光顯について直ちに述べらるべきことであるが、それには先づ日蓮聖人が釋尊の付囑を受けたる末法弘通の使者であることを立證することが必要であるので、開目鈔の後半は主としてこのことの立證のために用ひられ、それが一般に理解せられるのを待つて、本尊鈔に於て始めて題目五字の救濟力を明かにせられたものと思はれるのである。

そこで、開目鈔には前記の如き本尊の實在性とその統一神としての絕對性とを徹底的に論證せられたばかりでなく、又一面には、日蓮聖人がこの法華經の現實的體驗者として、經の中に預言せられた末法行者としての御資格を完全に具現せられた旨の、徹底せる立證を掲げられてゐるのである。而してこれによつて、日蓮聖人は單に末法に出でし法華經受持の一僧侶としての地位より一歩進んで、實に法華經そのものゝ內部に於て釋尊の化導の重要部分を擔當する、一個の菩薩としての地位を獲得し給うたのである。即ち法華經の一品二半は單に世尊が之を說かれ當時の聽衆が聞法によつて成佛を得たといふ直接の効果があつたといふに止まらずして、この法を聞いても尙謗法等によつてその利益を受け得なかつた末世の衆生に對しても、尙直接の化導を及ぼすこととなつたのである。何となれば、この場合釋尊の化導は單に衆生に法を聞かしむることに存するのではなく、寧ろ之を聞いても信受せざるものに渴仰の心を起さしめんがためにわざと御身の相を隱して、寧

ろその残し置かれし「是好良薬」の教法により一擧にして毒の病を治さしめんとする遠大なる御考慮に出でられたからである。而してこの是好良薬の教法を實際に衆生の口に飲ましむる仕事は、如來の滅後如來の命を受けて末法の世に法を弘むる本化行者によつて果さるべく佛陀が定めておかれたのである。日蓮聖人がこの本化の行者、如來の使者としての地位を獲たまふまでに、如何に深刻なる忍難の體驗と如何に痛烈なる懺悔反省と、如何に透徹せる思索研究とを經られたるか、是は開目鈔の魅力ある筆致によつて最も切實に描き出されてゐるのである。

本尊鈔はこの開目鈔に示されたる徹底せる智解と血の出る樣な深き體驗によつて得たまひし本化行者の解釋權とを實際に活用することによつて、壽量品の所謂「是好良藥」が即ち釋尊の功德の結晶たる「妙法五字」に他ならぬことを、身を以て實證し斷定さるゝことを主要なる目的として書かれし御文章と見るべきである。それ故に、本尊鈔は開目鈔に示されし日蓮聖人の智解と體驗とを離れては、恐らくその最も深遠なる根抵を缺くところの文章と化してしまふのである。從つて開目、本尊の兩鈔は恰も全體として一個の文章なるが如く、最も密接に關聯させて拜讀することが肝要である。その中でも教義上特に大切な點は、本尊鈔中に示されたる本尊の體相が開目鈔に於てその實在性を徹底的に論證せられたる「本門壽量品の本尊」（無始實在の本佛）なることを明瞭に意識すべきことである。即ち開目鈔がこの本尊をその道義的根抵に約し實在性に約し無始盡十方に亘る全宇宙的活動に約して論ぜられたるに對し、本尊鈔はこの同じ本尊が吾等娑婆世界の衆生に向つてはたらき給ふ現實的作用並に體相に約して述べられたのである。（又一方には、開目鈔が一切經中に說かれた各種の本尊を比較校量してこれを本門壽量品の本佛に歸著せしめたのに對し、本尊鈔は天台の理具の觀心より説を起しこれを事行の妙法五字と本門の本尊とに歸せしめたものと考へられる。即ち前者は本尊の

觀立であり、後者は信行の確立である）而して本尊鈔中本尊の觀心に關して特に述べられてゐる所があるのは、畢竟この本尊の實在性を鮮明に意識せんがためであつて、この點は開目鈔の智解に照し最も正確に理解せねばならぬ。何となれば若し然らずんば、折角開目鈔に於て本尊の實在性（と上行菩薩の出現と）を論證し、本尊鈔に於て更に緣了の問題に進んで、釋尊の功德力を意味する妙法五字の御はたらきを說明したることによつて、吾等の日夜に信仰を捧ぐべき本門の三寶式が成立したるに拘らず、而もこの本尊鈔によつて却つて天台流の觀念行に還り、折角の本尊も題目も其の意義を失ふに至るからである。それ故にこの「觀心本尊鈔」の題號は其の最も究竟せる意味に於て、一面には「實在本尊鈔」の意に、他面には更に進んで「信仰本尊鈔」の義に、解釋すべきものであることを知らねばならぬ。

本尊鈔の觀心につき述べた序に、同鈔の教相のことについても少しく述べることゝしよう。本尊鈔の教相といへば大體に於て有名な「五重三段」といふ所に述べられた所で盡きてゐるのであるが、これは既に開目鈔に於て內容的に詳述せられた所と少しも異つてはゐないのである。即ちその要旨は、本門壽量品を以て一代經の中に於ても、法華三部經の中に於ても、本迹二門の中に於ても、更に總じて三世諸佛の經々の中に於ても、最高の中心教義であるとなす點に存するのであつて、「一品二半より他は小乘教邪教未得道教覆相義と名く」といはれたのは「一切經中に壽量品ましまさずば天に日月の云々」といはれた開目鈔の文章と全く同じ意味に他ならないのである。而してこの教相中最も注目すべき文章は、

設ひ法は甚深と稱すとも未だ稱熟脫を論せず、還つて灰斷に同ず、化の始終無しとは是なり。譬へば王女たりと雖も畜種を懷姙すれば其の子尙

ほ旃陀羅に劣れるが如し。

といはれた所である。こゝにいふ「種熟脱」とは何を意味するか、「灰斷」とは何を意味するかといふ點については、今まで本論に於て論じた時間と超時間、釋尊の本體（如來秘密）と現實的力用（神通之力）、五百塵點劫以來の主師親關係と妙法五字による現實的救濟、正因佛性と緣了の二佛性等々の諸義に照して既に明かであらう。（殊にこの種熟脱といふ教義が所謂「化導の始終」に關係した問題であることに注意せよ）「人此の理を見ず、是れ因緣の事相なり、と謂つて輕慢して止まざれば、舌口中に爛れん」（玄義三）。釋尊と吾人との現實的因緣に感謝せずして徒らに一念三千の理論のみに心を奪はるゝの徒は宜しくこの文を見て反省すべきである。

さてこの五重三段の教相は在世滅後によつて別段の相違はなく、唯だ法華經就中本門の教が在世よりも寧ろ滅後を目的として說かれたといふ點を力說されてゐる。この點は小乘よりも大乘、權大乘よりも實大乘、迹門よりも本門と次第に滅後本位の意味を强めて行くのであつて、從つて右の教相に於ける本門中心の思想は在世よりも寧ろ滅後に於て最も重要なものとなるのである。而して在世の本門と末法の初の本門とを比較して「彼は脫、此は種、彼は一品二半、此は題目の五字なり」といはれたのは、是は行法及得益（同じく得益の差は機根の差に基く）の上に於て、在世（本已有善）は釋尊より直接に一、品、二、半、を聞いて、脫益を得、滅後（本未有善）は釋尊の御妻を拜せざるが故に、妙、法、五、字、を受持して、下種益を得ることを明されたのであつて、經としては何れも本門壽量品に基くこと勿論である。（即ち末法に於て讀誦よりも寧ろ唱題を第一の正行となすといはれても、その題目はやはり壽量品の肝心であり、一部二十八品の意なのであるから、本門を第一とする意味合は少しも變つてゐないのである。又凡そ爽略を捨てゝ肝要を取るといふことは、法華經の有する神秘的救濟力の方面を五字七字の題目の中に包含せしむるのであつて、その表はさゝ意味合に於ては經文と題目との間に何等の相違はないのである。故に壽量品以上に妙法五字といふ特別の教がある樣に考へるのは全然法華經を解せざるものといふべきである。）彼の種脫相對と稱して一品二半と妙法五字とを一つの教相として對立せしめたり、或は教相と觀心とを更に一つの教相として示さんとするが如き、その無意義にして取るべからざることは今更論ずるまでもなからう。

それ故に妙法五字を受持するについては、本門壽量品の教に基き、それが釋尊より賜はりたる是好良藥の教法（その中には釋尊の全人格的神秘的なる救濟力が包含されてゐる）であるといふこと並びにこの良藥を服することは一に「雖近而不見」の釋尊に對する絕對的渴仰戀慕の情よりして之を信念口唱するものなることを辨へ、教主釋尊と妙法五字と本化の使者たる日蓮聖人との關係を明確に意識することを忘れてはならぬ。かくて、本門壽量品の本尊は、理論的には吾等の主師親三德者にてまします本門壽量品の釋尊であり、實踐的には、釋尊が吾等に働きかけ給ふ實際の御有樣を意識せんがために、本門の三寶式、即ち教主釋尊と、妙法五字と、本化上行菩薩日蓮聖人との三者によつて示されるのである。（尙この他に多寶如來や十方の諸佛を加へ受戒作法の意味から解釋される場合もあるが、それはこゝでは省略する。）但し釋尊といつても本門壽量品を說かれし靈山虛空會上の釋尊であるから、圓顯の場合にはそこに本尊鈔に示さるゝやうな佛菩薩諸天善神等を必要とする、而してこれらの善神等もこの場合釋尊の一種の應現としてその化導に參加して居られるわけである。それ故にこの本尊を拜し奉るときは之によつて釋尊の御教化が如何に懇切にして而も周備せるものなるかに感激の情を喚び起すと共にその實際の御有樣たる靈山淨土の光景を眼のあたり拜するが如く感ずることが最も肝要なのである。「一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず

時に我及び衆僧倶に靈鷲山に出づ！」その靈山の釋尊を瞬時も見遁すまいとして熱誠籠めて題目を唱へ渴仰戀慕の情を捧ぐるもの、何の餘裕あつてか單に「己心に十界を具す」といふ如き中途の理論に心を奪はるゝことが出來よう。

それ故に壽量品の實在の本尊が既に完全に建てられてゐる上に更に心具論や同體論を擔ぎまはつて本尊の中に案りに觀心の意識を混入せんとするが如きは、是は一念三千論を未完成のまゝ丸呑にすることによつて教義上の消化不良症を起してゐるものといふべきであらう。本尊鈔の內容は決してそのやうな不透明な立場を取つてゐるものではなく、寧ろ開目鈔に於て既に打立てられた信仰上の本尊に對し更に觀心の義を詳述してその實在性の論證に資し、同時に正因佛性（尊なる觀心）より緣了二佛性（妙法五字）の同題に遷んで、本尊の救濟の意義を信仰的に一層徹底せしめたものに他ならないのである。かくて一念三千の効果は一方には本尊の實在性の中に、（「一念三千の法門は但だ法華經の本門壽量品の文の底に沈めたり。」）他方には妙法五字の神秘的なる救濟力の中に、（「佛大慈悲を起し、五字の內に此の珠を裹んで、末代幼稚の頸に懸けしめ玉ふ。」）既に完全に包攝されてゐるわけである。——信仰は觀心の上に立ち觀心は信仰の基礎となるには相違ないけれども、成佛のための修行として直接に觀心を用ふることは、これは過去の曆であつて末法の世の中には用をなさない。若しも信智一體の信を用ふるといふのならば、その智は信仰と完全に一致し信仰に向つて完全に路を開くやうな智慧でなければならぬ。これ等の點を明瞭にするために、日蓮主義に於ける一念三千論の意義が何よりも第一に佛陀と衆生就中その佛性に關して、その「實在の根本原理」を明かにする點に存することを徹底的に理解することが必要であると思ふのである。

以上を以て大體、本論の目的たる實在の原理は終つたのであるが、折角一念三千についてやゝ纏まつた議論をしたことであるから、序にその實踐的歸結についても一言しておくことゝしよう。即ち、本佛の實在あらはれて宇宙が單なる理の實在より慈悲活動の實在にうつゝて行くといふこと、それによつて一念三千も單なる哲學より宗教的信仰に轉化することは既に述べた通りであるが、更にこの佛身觀に基いて、佛性論も理佛性より行佛性にうつり、道德の根柢が宗教的に基礎付けられる點をも理解せねばならぬ。即ち、一念三千はその第一の階梯に於ては「心佛及衆生是三無差別」といつて佛も衆生も單に潛在的なる理性の見地より見るのであるが、第二階梯に於ては佛は活動的なる三身即一の個性的佛陀となり衆生はこの佛をその理性の中に具してゐるのであるから、一方は顯動的にして他方は尙潛在的である。然るにこの佛身觀の上にあらはれた活動的意味を更に徹底して考へて行くと、衆生に佛性ありといふことも結局佛がこの衆生の上にはたらきかけ、衆生がそこに菩提心を起してよき活動をあらはして行くといふその事に他ならぬといふことになつて來て、單に佛が活動的なるのみならず衆生の佛性も亦同樣に活動的のものとなつて來るのである。（第一の場合には哲學の上に宗教及び道德が立つ、第二の場合には哲學と宗教とが一つになつて道德だけがその上に立つ、第三の場合には哲學宗教道德の三者が完全に一元化されるのである。詳しくは「法華經要義」十如是の解釋の所を參照。）かくて實相論は、上には佛の無始無終なる大慈悲の活動あり、下には衆生がこの佛にあこがれこれに向つて向上して行くその活動があるのである。あたかも太陽が萬物に向つてたえず暖き光明を與へ、草木がその枝や莖を太陽に向つてさしのべることにより、たえずその光を受けて生長發育する、その有樣が佛と衆生との關係に於て宇宙的に存在してゐるのである。かくて本門の本尊は、單に宗教的に吾等を救ふ御はたらきであるばかりでな

く、同時に吾等のよき行を通して社會的に顯現するところの一切の道義的活動の根本原動力となり、そこに個人的解脱を主としたる小乘の戒律とは異なるところの社會的活動的にして靈力潑剌たる本門の事の戒壇が成立するのである。かくて日蓮主義は先づ大日本國よりして東西兩洋の世界を照し、本佛の大慈悲に輝く妙法が一閻浮提に廣宣流布することゝなるのである。こゝに哲學宗教道德を中心として一切の文化が綜合統一せられ、一切衆生が靈肉兩方面に於て現當二世の大樂を受くることゝなるのである。

此經は本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住す。（無量義經）

夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり、所謂主師親これなり。又習學すべきもの三あり、所謂儒外内これなり。（開目鈔）

天晴れぬれば地明なり、法華を識る者は世法を得べきか。

（觀心本尊鈔）

懺悔篇　第一

二、科學と現實

人生と法華經（其二）

池ノ内三雄

私達は春から夏にかけて兎角食慾が減退する。この時に食慾を增進させるものは、新鮮な野菜である。丁度この頃に市場に胡瓜などが澤山に出る。私達はこの胡瓜を好んで食べる。ところで、この胡瓜を食べる人はよく洗つて中には皮さへむいて料理をする人がゐる。だがしかし、こゝに一人の園藝家がゐるとする。そして彼は胡瓜を栽培することに妙を得てゐる。そして、彼はその胡瓜の促成栽培をする。そしてその作つた立派な胡瓜を彼は得意になつて市場へ賣りに持つて行くであらう。それは人々がそれを買つて食べてくれるからである。だがしかし、その食べる爲めの胡瓜ではあるが、この園藝家はその胡瓜のお尻に着いてゐる萎びきつた花の殘骸や、皮のまはりに付いてゐる蘚を一つでも落すまいと苦心する。誰もそんなものを食べる人はありはしない。食べるのは胡瓜の身だけであるのに、買ふ人の爲めには、それ等の無用な附屬品が最も大切なのである。又この園藝家はしやうがの促成栽培もやるであらう。この生薑といふものは、その香りと辛さの刺激性とが人々に嗜好されるものであるが、この園藝家は、この生薑を作る第一の苦心は、生薑の莖の根元のチョビリとした紅色をあらはすことに集中される。そしてこの紅色こそ促成生薑の第一條件であつて、これがなければ商品價値は零である。それは地下莖を食べる生薑に何等關係がないやうであるが、第一に必要なのである。このやうなことは、實際、カロリーがどうの、ヴタミンがどうのといふことばかりに氣を取られてゐる實利主義の營養學者には、理解し兼ねるところであるかも知れない。だがしかし、生薑のこの紅は辛さの反應的な一標示であるかも知れない。だが實際に於て何等味に相違がないにもかゝはらず、この紅のある皮をむいてしまつたなら、まつたく商品價値がなくなつてしまふ。こんなことを聞いた共產主義者や、社會主義者達は、『勞働者を搾

取した金でそんな贅澤なものを食べて嬉しがつてゐるから他達は資本家階級に反抗するのだ。』と公憤するかも知れない。だが、たゞ食物をたべて滿腹さへすればそれで滿足する餓鬼道には、又このデリケートな味覺心理を理解することは出來ぬであらう。資本家とてもやはり人間である。そんなものでも愛好するには、何かそこに意義がなければならぬ。だが資本家達も、それ等の新鮮な美食に對して滿足と感謝との心が起らず貪り食ふだけならば呪はれる資本家達も、呪ふ無産者達も共に餓鬼道に陷ちてゐるであらう。

元來食物といふものは『人間のカロリーの再生産の爲めに必要な滋養分、或は營養分を攝取することが出來ればそれでよいのである。』と云つても決して間違つてはゐないであらう。であるからこれは『眞理』であると云へる。だが胡瓜の蕋とか、生薑の紅色とかいふものは、その新鮮美の象徴である。この胡瓜に含まれたる營養價の『眞理』とこの蕋や紅に現れたる『新鮮美』の人間の精神に及ぼす食慾感とがあつてこゝにはじめて善良な食物としての價値が生ずるのである。その眞と、美とを象徴したるところに善といふ感じが起るのである。これが食物に於ける、眞、善、美の調和である。ただこのやうな新鮮な野菜が不幸にして、あらゆる人間の日常の食膳に行き渡らせることが出來ない經濟組織の下に、人間が生活を餘儀なくされてゐるからである。それであるから贅澤だと罵られたり公憤を起したりする人が出來てくるのである。そのやうな食物を口にすることそれ自體は決して絶對的に惡いなどゝいふ理窟は成り立たないであらう。私はこの贅澤な新鮮な野菜があらゆる人間の食膳にまで上り、人々が食物を貪り食ふ餓鬼道に墮落する代りにその美しさと、この不可思議な大自然の威力を讃歎しつゝ、お互に歡喜に滿ち充ちて、食事をすることが出來るやうな社會の來るのを切望するものである。そして又、あらゆる人間がこの野菜を作る園藝家のやうな心にまでなつてゆかなければ、ほんとうの人間味ある生活とは言ひ得ないであらう。やがて營利の爲めの生産が亡び平和な世界がこの世に出來て、人々はこのやうな新鮮な野菜を商品として作るのではなく、一家の趣味として作られるやうになつたら、どんなに又樂しいことであらう。その時こそ、人々はまつたく自分の寢床でも作るやうな熱心さをもつて、胡瓜の苗床を作つてやるであらう。彼は自分の魂を蒔き付けるやうな深い注意を拂つて種を下すであらう。彼はその芽萌ゆる日を、一日千秋の思ひで待つことであらう。彼は可愛い子供達を寢かし付けるやうな眞心こめて夜は暖かに莚などをかけてやるであらう。彼は温床の温度の一度半度の上り下りさへ氣使ふであらう。そしていよ〳〵そのうづ黒い床土の中から、おづ〳〵としかも滿身の力を込めて萌え出した時、彼はまつたく自分の子供でも生れた時のやうに喜ぶであらう。そして、母親が子供にお乳を與へるやうに適度の温水をやつたり、適當な肥料を注意深く施してやつたり、移植してやつたり、一日々々と大きくなつて行く胡瓜の苗をまつたく子供の成長を喜ぶ親達のやうに喜ぶことであらう。若しもその濃い綠の葉に小さな黄色な斑點でも見出さうものなら彼は自分の子供が熱病にでもかゝつた時のやうに驚いて、ボルドー液などを作つて早速かけてやるであらう。そしてこのベト病が治つたなら彼はやれ〳〵と安心することであらう。それからいよ〳〵胡瓜の木は元氣を出してぐん〳〵と伸びて來ると、彼は可愛い子供達に竹馬でも作つてやる父親のやうなやさしさと、熱心さをもつて支柱を立てゝやつたり繩を張つてやつたりして、その蔓の滿足な成長を計つてやることであらう。そしてその蔓の一節々々に、小さな胡瓜のついた蕾が見え出し、それがやがて花が咲き、胡瓜が節から節へと成つて行つて、今までの苦勞がやつと酬ひられて、第一の收穫が得られた時、彼はまるで子供達が小學校か中學校を卒業して證書をもらうて歸つて來た時のやうに喜ぶであらう。だがその時に、彼はその初成りの胡瓜を食べる爲めに作つたのだからと云つて、自分一人でアングリと食べてしまふであらうか。否、否、斷じて否だ。このやうなほんとうに土に親しむことの出來るやうな人々は、先づ敬虔な心をもつて、先祖の靈に捧げたり、氏神樣に捧げたり、それ〴〵自分の信仰してゐるところのものに供へて、それから後にそれを一家の者が分け合ふて食べるであらう。それから次第にその胡瓜から收穫が多くなると、近所の友人の家へ贈つたり、又遠方の親類にまでも持つて行つて、食べて頂いて喜び合ふことであらうこうした生活が、たとひ貧しい中にも樂しみと平和に滿たされて、何等束縛なしに出來、又小むづかしい理窟や、意識なしに出來たなら、それがほんとうの幸福な生活ではなからうか。こうした歡喜と感謝と、平和と幸福とを理解することの出來ない人間は何時の時代にだつて、どんな自由な生活の中にだつて、必ず眞の幸福といふものを見出すことが出來ないであらう。こうした幸福感を味ふことの出來ない人間は、まつたく人類を眞に幸福の世界に導く爲めの努力をするだけの資格のない人間達であらうと私は思ふ。

だがマルクス主義者等は云ふであらう。

『我々革命家にとつては、そんな土臭い涙脆い幸福は無用なのだ。』

と。實際革命家にはこの涙脆さは絶對に禁物であらう。だがこの胡瓜の成長に注がれた一滴の汗と、喜びの涙こそ、人間の心の中に秘められた、尊い佛性から滲み出た膏である。釋尊はこのやうな佛性の膏をもつて一切衆生を潤ほし、三千大千世界をも潤ほしたのである。

寢かへりをするぞよそこのけきり〳〵す　一茶

一茶さんのこの味ひが味はゝれなければ、日本民族の心理をほんとうに理解することは出來ないと思ふ。僅かこの十七文字の俳句の中に、人間味の眞實性を發露させた、一茶の心は、まつたく日本民族のあらゆる人々の心の中に浸み込んでゐるものではなからうか。

この俳句といふ短詩形の平民藝術は短歌といふ和歌と共に日本民族特有の藝術であつて、その普遍性と包溶力との自在なことに於て、日本人の國民性を最もよく表現したものではなからうか。僅か十七音や、三十一音ではあるが、人間の氣持を何人にも自由に表現し得、しかもリズムの豊かさは五七五音、或は五七五七七音といふ生理的リズムの自然の表はれとして、それが慈悲心を本能的に潜有してゐる日本の人々によつて爲はりなき自己と、自然觀照と、ものゝ哀れを感應して、縱横無盡に歌はれて來たのであつた。

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉

この靜寂そのものゝやうな觀照こそ、人間の心をほんとうに淸らかにし、落ち着いたゆとりある平和な原始の世界に引き戻して來させるのである。『何だ、そんなことが。』と云つてしまへばそれまでゝある。だがこの味ひが解らなければほんとうに日本民族を理解し幸福を感じさせることは出來ないであらう。

月夜よみ薬を菜ねてひとり居る

秋の野づらのこほろぎの聲　小泉千樫

どんな勞苦があらうとも、どんな貧困な生活であらうともこうした境地に安住出來ることを、しみ〴〵と感じて喜び得るのが、我々日本民族の神代からの傳統的性格ではなからうか。こうした傳統的性格を無視して、日本民族の幸福も平和もありはしないであらう。

かつて私が眞理なりと信じ、眞理なりと主張し、眞理なりと行動した社會科學としてのマルクス主義の一切は、日本民族及び全世界人類に對する大きな冒瀆としてこの罪は、單に法律上の罪惡のみでないことを私はしみ〴〵と知ることが出來た。それ故に私に對する罰は、まつたく法律上の罰によつてのみ消滅すべきものでないことを知つたのである。

この宇宙に遍在する至上の威神力に對して、心からの懺悔をせずにはゐられなくなつたやうな氣がする。それは自分の宇宙眞理の無明に對する眞の懺悔でなければならない。これが私の眞實の滅罪の道であり、正しき反省であると思ふ。そしてこれは又、究極する處、自己の本質並びに使命を感得せんとする懸命の努力であり、哲學である。しかし人が若し、大宇宙の中に眞に自己の本質を見出すことが出來たならば、人は誰でも宇宙間の一切を、自己を愛するが如くに一切を愛するであらうし、又愛さずにはゐられなくなるであらう。されば、イエス、キリストは、

父よ、なんぢ我に在し、我なんぢに居るごとく彼らも我らに居らん爲なり。是なんぢの我を遣し給ひしことを世の信ぜん爲なり。我は汝の我に賜ひし榮光を彼らに與へたり是われらの一つなる如く彼らも一つならん爲なり即ち我かれらに居り汝われらに在し彼ら一つとなりて、全くせられん爲なり。是なんぢの我を遣し給ひしこと、我を愛し給ふごとく彼等も愛し給ふことを、世の知らん爲なり。』

（ヨハネ傳第十八章第二十一節――二十三節）

と申され、釋尊は涅槃經の中に於て、

一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是如來一人の苦なり。

と宣はれ、又日蓮聖人も

一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是日蓮一人の苦なり。

と申されてゐるのである。

人が眞の自己の本質を見出さんとする時、彼は深い惱みの中に苦しむ。だがしかし、この苦みには言ひ知れぬ喜びがある。それは單なる物質上の問題や、小さな自我を超越した世界であるからである。そこにはたゞ無我の愛があるのみであるからだ。そこには一切衆生を潤す泉が湧き起る。その苦惱は泉の噴出するまでの努力の苦しみであり、その喜びは、湧出のその一刹那の歡喜であり、そして又それは無限の歡びの連鎖である。かくして苦惱と歡喜は滾々として、永遠に繼續する。そこには科學に超勝した世界がある。それが諸法實相の世界である。

釋尊は、『諸法無我』と說いて衆生には『自我』があるから『渴愛』が起り、『渴愛』が起るから一切が皆苦となる。『諸行』は『無常』であるのに、衆生は『自我』によつて自己の欲するものを常住ならしめやうとする貪慾な心を起すから、一切が皆苦となる。故に凡夫の『自我』を滅却すれば苦がなくなる。此の世の苦しみを斷滅するには『諸法無我』なりと信じて自我を無くし、渴愛の心を捨てゝ、『諸行無常』あると觀じ貪慾な心によつて、自我の常住であるといふ妄念を棄てることである。斯く觀見すれば一切衆生が皆佛になれるといふ悟を開かれて即ち無我の境地に安住して佛陀となられたのだそうであるが、しかしその悟の動機はやはり宇宙の本體、乃至自己の本質の究明であり、生老病死の人生の苦しみの原因を明らかにし、人類の苦惱の根原を除いてこれを安らかにしてやりたいといふ自我の愛を超越して、無我の愛に立たれこの大慈悲心によつて、人類救護の大願を成就せられたのであつた。

これはたしかに苦しい修業であつたに違ひない。人は彼の持つ愛が大きければ大きいだけ、又その苦しみも大きくあるであらう。

偉大なる者には、偉大なる苦みがある。

○身延の山で登りて

×

あくがれの身延の山の朝ぼらけ
白梅の花のほころびにけり

×

目に映る身延の山のあら〻ぎや
さやけきかもよ明けの山々

○身延深敬病院にて

×

あはれ／／人の世ならぬいたつきに
み佛祈る人のうれしき

×

大方は不治の如くに聞きしかど
愈ひぬと聞けは佛たふとし

三、反逆の子と母性愛

赤城の山も春霞につゝまれて、いとも靜かな前橋の獄舍より、親愛なる清一兄様にこの手紙を差し上げます。

萬駄の花も一朝の夢と化して、目には淋しき若葉の、逝く春の頃となりました。多感な人の子に轉々無常を感ぜしめる今日此の頃、大兄様御一家様、如何御消光あらせらるるや、御伺ひ致します。既に御承知のことゝ思ひますが、私は昨年十二月十五日に登多摩の刑務所より、この前橋刑務所に護送されて參りました。そして、無事に刑に服し、一日、一日と更生への歩みを續けて居ります故、何卒御安心下さい。

實はこちらに參りました當時から、お手紙を差上げやうと度々思ひたちましたけれども、思へば極惡深重の吾が身故、今大兄には物心世事に關れゝば即ち奇を知らんとする年頃の愛兒、忠雄君もあることなれば、この極重惡人の音づれも、度重なれば如何かと思ひ、吾が子の教育には一入御注意遊ばさるゝ大兄のこと故、私も申譯ないとは思ひ乍ら、つひ／／心に怖ぢて、今日に及びました。どうぞ御無沙汰の罪をお許し下さい。

これは今は亡き我が義兄清一に送れる前橋刑務所よりの、私の第一信の冒頭の一節である。それから尙ほその手紙に私は續けてこう書いた。

實はこの手紙を差上げやうと決心いたしましたのは、最早一ケ月も前のことでした。大兄に委託いたしましたチューリップに就いて、市場の好み、その純系の繁殖、特性の分離、固定等々に關しての私の希望を申し上げ、併せて具さに私の最近の心境を語らして頂かうと思ひ立ち、特に封筒發信を出願いたしたのですが、いろ／／の手續上、つひ

つひ今日まで延引いたし、チューリップはすでに落花繽紛、昨日の夢と化し花期已に了れば私の老婆心も無用に終り、今後はたゞ球根の掘上げと、その後の處置については、ただ大兄の技に待つのみ。

されど、思へばこの五月に入りて、この手紙を書くも何かの因緣なるべく、誠にこの五月といふ月は、私の一身上の一大事が累々と相集れる月にて、今また私の心境にまつたく一大轉換が起りました。それに就いてこの手紙を五月に入つて書くといふことも、まつたく一つの奇緣です。

私がこの娑婆世界に呱々の聲を上げたのは、正に明治三十七年五月二十五日でした。この世に生れてはじめて血類の死に直面したのが、七歳の五月三十一日です。これは私の祖母の祥命日です。

その次は忘れもせぬ大正十一年五月十日、畏くも、今上陛下未だ東宮殿下に在しませし御時、かの田島ケ原に御徴行あらせられ、親しく天然記念物、櫻草に大御心を寄せられて、自然科學の御研究を遊ばされ給ひし時、荒川堤の下にて千餘の小國民と共に謹んで奉迎申し上げし際、その小國民の最敬禮を指揮いたしたのはその時僅かに十九歳の若年の私でした。

畏くも、殿下には御拳手あらせられて、その小國民の最敬禮に御心を御止め遊ばされしこと、嗚呼その時の胸もはりさくるばかりの感激を今も忘るゝことがありません。これ程の身に餘る光榮を得しことは、まことに私の一身上に於て、またと再びないことで御座いませう。

然るに何ぞ！。その後僅かに二年、これ程の光榮を擔へる身の、たゞ烏合の大衆の力に壓倒されて、大逆の大惡道に踐み入つたのでした。それはかの關東大震災によつて、一時的好況の波に起ち上つた、大衆運動でした。丁度大正十三年五月一日、即ちかのメーデーも慚愧の意に於て、また忘るゝことの出來ぬ一身上の一轉期でありました。

かほど一身上の一大事の思ひ出多き五月にまた一身上の一大記念塔を建てやうと思ふのです。大分前置きが長くなりました。手紙の上手なお手本として、我が師拔井先生は常にかの本多作左の

『一筆啓上火の用心、おせん泣かすな馬肥せ。』

の陣中からの手紙を示して與れましたが、今、一身上の一大事を書くにはそれでは、とても書き盡せません故、私は思ひのまゝ、赤裸々の懺悔を申し上げやうと思ひます。

私には隨分永い間、胸の裡に堪へ難きまでの、深き悩みと苦しき悶えとが續きました。精神優位か、物質優位か、生命とは何ぞや。人間とは何ぞや！我とは何ぞや。靈と肉との闘ひ！

眞理を愛することに於て、人後に落ちまいと努力してゐ

た私にとつて、これはまア何といふ苦しい血みどろな戰ひでしたらう。しかし勝利は遂に靈にありました。永い間唯物論の世界の中で『眞我』といふものがまつたく行方不明になつてゐたのでした。その『眞我』が今や我が身に還り我が肉體との爭ひは、何といふ慘めな戰ひでしたらう。しかし勝つべきものが勝たざれば、我が身は一生奈落のドン底に呻吟してゐたことであらう。

世を怨ずる性の悲しみ幾とせの
秋をしみ〳〵泣くは誰が子ぞ

と我が運命の揶きをかこちし我も、今は明らかに、

阿脩羅王が戲れ去りて今は我が
胸に佛のやどる靜けさ。

と歌ふ身となりました。

大兄の御懇篤なる訓誡も、肉親の血を絞るが如き教誨も聞かばこそ、これのみ唯一の眞理なりとの信念によつて、頑に固つてゐた私の頭は、肉親の血と涙とをもつてしても解くことは出來ないかの如くでありました。

『批判の武器は武器の批判に代位することは出來ぬ』

といふマルクスの信念は私にもありました。

實際、社會進化に於ける經濟的法則の限界に於ては（或る宗教家達の中には、社會は退化してゐるといつて笑つてゐる人もあるが）たしかにマルクス主義にも一面の眞理があると思ひます。それは今まで私の接近した宗教乃至哲學では、マルクス主義を克服することが出來なかつたからです。マルクス主義の方が一歩前進してゐるやうに思へるからでした。

私が十九歳の頃、『群靈一元、假に名つけて佛と爲す、一元能く萬物を造化す。』と汎神論哲學を說いて教へられた忽滑谷快天師にしても。二十歳の頃、『無一物中無盡藏有花有月有樓臺。』の哲學によつて、乞食の生活が最も眞理に則した生活であると、懺悔の生活を教へてくれた西田天香師にしろ。『神は愛なり、愛の本質は即ち宇宙意志である、宇宙意志は無抵抗である。無抵抗主義は神の愛である。』と言つて無抵抗主義を教へて呉れた賀川豐彦氏。『悔ひ改めよ、然らば汝は救はれん。』とキリストの犯罪の價値と、その救濟とを教へて呉れたホーリネス教會の中田重治郎氏。『無我の愛を覺知することである、それが阿彌陀樣の大慈悲である小我を捨てゝ無我の愛に生きよ。』と教へて呉れた伊藤證信師。五輪觀、阿字觀の秘密を教へて呉れた新義眞言宗智山派の御嶽隆道師等。又『統一ある多神教、摂理ある一神教』と云つて、天御中主命を宇宙の根本なりと說いて、日本精神に依る、睿流神道の高橋止觀先生等々。我が門をたゝいた人々を數へ擧げて見れば何れも皆、一宗一派の大德です。これ程精神界に深い緣を持つてゐた私が、マルクス主義に走つて一歩も退く色を見せなかつたのは、大兄にとつて、まつたく一つの不思議な事實であつたに違ひありません

——以下略——

私はこのやうに、それから尙永々と私の心境について書き送つたのであつた。

昭和三年三月十五日、世界的大事件として、かの有名な三・一五事件に依つて、檢擧された私は、二ケ年の間未決四として或る時は市ケ谷刑務所に、或る時は豊多摩刑務所にと、轉轉と拘留されて居つた。そして遂に病氣となり、保釋假出獄を許されて、郷里に歸り、靜養することゝなつたのである。その時に、私の母は私の村では未だ一人も唱ふる者さへなき南無妙法蓮華經と題目を唱へて、共產主義者となつた私を、改心させやうと、一心に日蓮聖人に祈られてゐるのであつた。『凡て宗教は阿片である。』といふマルクスの言葉を信じてゐた私は、ほとんどそれを笑殺してゐたのであつた。昭和七年一月。たま〳〵公判準備の爲めに上京し、具さに社會の大勢を觀察するに、國際的革命運動の急速なる進展と、救濟し難き農民の窮乏化と、失業者の增加による社會生活の不安と、半永久的不況による經濟的狀勢の窮迫等、すべて革命的諸條件の具備せるにもかゝわらず、日本の革命運動が萎縮狀態にあるのは何に基因するかを究明せんと志し、再び革命運動の渦中に身を投じたのであつた。そして、私はあらゆる方法を講じて、その原因を探究した。その結果第一に感じたことは四・一六事件以後の日本共產黨が、極左的非革命的組織理論によつて支配されてゐることを發見したのであつた。この點に就いては、部分的ではあるがコミンテル、及びその西歐書記局等の『日本に關するテーゼ』の正しく指摘してゐるところでもあつた。私は先づ第一に、日本共產黨の組織的な根本的改革の必要を痛感したのであつた。私は何を措いても、コミンテルンの手によつて、日本共產黨の根本的改革をなさしめやうと、その準備に取りかゝつたのである。だがしかし、法網は決して私の自由な活動を許さなかつた。私は遂に再び檢擧されたのであつた。

私は昭和七年九月。××警察署に檢擧され、こゝでは一寸筆にも口にも表現することの出來ないやうな慘虐な事實を經驗した。幾度か息の根が斷たれたのではないかとさへ思はれることがあつた。しかし私は共產主義に對する信念は斷乎として捨てなかつた。拷問の苦しい幾日かゞ續いた。世界文化の粹を集めた帝都を飾る爲め、東京の郊外にも市制が施行された。大東京建設の歡喜に醉ふた市民の、提灯行列の賑ひも留置場の中にまで響いて來たのであつた。警察の留置場に一ケ月餘は過ぎた。秋もはや晩秋の十月二十九日、これぞ歷史的大公判の判決の下つた日である。この日こそ、迷ひに迷つ

て遂にマルクス主義の妄信に固まつて居つた私を、偉大なる佛陀の大慈悲の懐に、連れもどして呉れる緣を作つた日であつた。この日私は裁判所の同行部屋で待ち倒れして缺席裁判に付された、奇怪な言ひ知れぬ不滿を懷いて、二人の警官に護られ乍ら、たそがれ時の東京地方裁判所の門を出た。何氣なくふと振り返つて見ると、うす暗くなつた裁判所の裏口の邊を、二人の老婆がうろついてゐるのが目に入つた。

『おゝ、お母さんだ！』

『待て！』

割れ鐘のやうに警官は叫鳴つた。私は駆け寄つて行きたかつたのだ。しかし私の手には手枷があり、腰には縄が付いてゐた。その一人はなつかしい私の母と、他の一人は私の第二の母なる渡邊政之輔の母であつた。たつた一人の子の政之輔を遠き臺灣に失つた渡政のお母さんも、年に似合はず年老ひて見えるが、私の爲めに苦勞に、苦勞を重ねた私の母は、それにも増してまつたく見る影もなく、傷々しい程ひどく老ひ衰へてゐた。私の母は、この老體を只一人で、田舍からわざわざと、この共產黨の公判に出る私を見たいが爲めに、否、狂へる吾が子を救ひ出さんとの一念で上京したのであらう。

あゝ、慈愛たる哉、母の一念！

あゝ、偉大なる哉、母の一心！

この老衰した母を見た私の眼は、もう涙で一杯であつた。しかもそれが處もあらうに、長き宮城の甫、櫻田門外、裁判所、警視廳等の高厦峙ち、車馬縱横に疾驅する都大路の巷であつた。私はこの時はじめて母性愛の偉大なる力を今更の如く感じた。私達はたゞ眼と眼とを合せるのみで離れなければならなかつた。私はその時から母に對して心から、あゝ勿體ないといふ氣持が起つた。

私は保釋を取り消されて、再び豐多摩刑務所に送られた。久し振りに獨房へ歸つた私は何か物足らぬ殘り惜いやうな氣がした。

私は靜かに考へた。社會の問題も念頭を少しも去らないが又母のことも片時も忘れられない。もうこれで母とは生き別れになつてしまふのではないかと思つた。だがそういふ血族的愛情の爲めに心を奪はれて、革命的情熱を消滅してしまふことを非常におそれた。私はその爲めに精神的に戰つた。もがいた。悶えた。苦んだ。しかしもがけばもがく程、その血族の桎梏を感じた。革命的情熱の爲めに、血族的愛情を犠牲にするのが正しいのか。革命的情熱を犠牲にして血族的愛情に延へるのが正しいのか。その何れに從ふのが自然であらうか、私はこの二つの現實問題の前に苦んだ。そして遂に私は何物かに對して、たゞ審判される者の祈りを感ずるのであつた。（つゞく）

法華經講話（第十七講）

妙法蓮華經方便品第二（其一）

小林一郎

これから方便品に入るのでありますが、前回にも申したやうに、法華經の全體二十八品を二つに分けますと、前の半分の十四品が一經りになつてこれを迹門といひ、後の十四品を本門といひます。

『迹門』といふのは、迹佛の教といふ意味であつて『本門』といふのは本佛の教であると考へられる。その『迹』といふのは『あと』といふ字で、丁度人間の歩いた足跡、或はお月樣やお日樣が水などに映りますその映つた形を迹と言ひます。所で一人の人間が道を歩きますと、歩く人は一人でありますけれども、足跡は幾つも遺る。又一つの月が空に在りますと、その一つの月が方々の海や川やなにかに澤山影を映すのです。それと同じやうに佛樣といふものはモトモト一つである筈でありますが、その一つの佛樣の教が樣々な形になつて、樣々な程度に依つて現れて行く。恰度本體とその影、或は一人の人とその足跡といふやうな風に考へられる。

それでお釋迦樣といふ一人の佛樣を考へて見ればこのお釋迦樣は今より二千數百年前に印度に御出現になつて、さうして人生の問題に就いていろ〳〵疑ひを懷いて、その疑ひを何とかして解かうと思つていろ〳〵學者を集めてその說をお聽きになつたけれ

ども、誰の説も自分を十分に納得させるだけの者がなかつた。それで到頭王様の御殿を捨てゝ、世間に出て、大勢の學者の門を叩いて教を聽いた。それでも滿足せられずして、御自分で六年の間頻りに考を凝した擧句に覺つて、覺つて後に五十年餘りその覺られた所を説かれて、さうして八十歳で入滅になつた。これはマア誰でも知つて居る事であります。

所がそのお釋迦様といふ佛様は、吾々と同じ土の上に御出現になつた佛様でありますが、そのお釋迦様といふ佛様はどうして御出現になつたかといふことを考へた時に、それは永遠の命を有つて居る、無限の力を持つて居る、世界にたゞ一つきり無い佛様、即ち本佛(根本)の佛が在らつしやつて、その佛が、吾々凡夫の迷ひに沈んで居るのを憐れんで、これを救ひたいといふ廣大無邊な慈悲心から態々人間の身になつて、吾々と同じ土の上に現れて、吾々と同じやうな生活をして、さうして吾々の眼の前で修行して、覺つて、然る後に教を説いて下さつた。さうして吾々に向つて、お前達も自分も同じものであるのだから、お前達も自分の歩いて來た通りの道を歩いて來れば、自分と同じものに成れるぞといふことを諭された。斯ういふやうに考へられるのであります。

そこでその釋迦牟尼佛といふものを、迹佛と本佛の二いろに考へる。迹佛といふのは、人間の身をとつて現世に現れて、或る時期が來れば現世から去つてしまはれる佛様、その佛様はチョウド空の月が水に映つて居るやうなものである。そのお釋迦様となつて現れた根本のものがある。それが所謂本佛でこれは永遠の命を有つて居るものであつて、不生不滅いつ生れたといふこともない、いつ死んだといふこともない、永遠のものである。斯ういふ風に考へるのであります。ですから私共が釋迦牟尼佛と言つた時に、印度に生れた八十年の命を持つた佛様と考へる時には、その釋迦牟尼佛は迹佛である。形を現した佛様である。併しその釋迦牟尼佛は肉體をとつて現世に出られたのだけれども、その肉體は滅びても滅びない永遠に生きて居る佛様、斯う考へた時に於ては、お釋迦様を本佛として考へることになる。

これはたゞ斯う申しただけでは極めて不完全な説明で、その事は尙先へ行つて壽量品といふ所で極めて精密に説かれて居りますから、そこで更めて申しますけれども、大體を言ふと本迹といふのはさういふことであります。本佛といふのは永遠の命を持つた佛様、この世の中に一つきり無い佛様、迹佛といふのはその佛様が假に相を現して、人間に教を説かれるいろ〳〵な佛様を皆迹佛と言ふ。ですからお釋迦様ばかりではない、何々佛といふのが澤山あるならば、さういふのは皆迹佛だといふやうに言へるのであります。

それをモット深入して言ふと、佛と名乘つて出たものばかりが佛ではない。佛と名乘らないで出たのも、やはり佛のはたらきの一部分だといふことになる。これは又後で言ふことでありますが、孔子の教であらうが、老子の教であらうが、やはりそれは佛の教の一部分だといふやうな解釋が附くのであります。

大體に於ては、お釋迦様といふ佛様を迹佛として見る場合と本佛として見る場合とがある。今この法華經に就いて見ますと、法華經の初めの半分は、お釋迦様が永遠の命を持つた佛様の現れたものだといふことを言つて居ない。たゞ印度に生れて三十で覺つて、八十で滅くなつた佛としてのお釋迦様、斯ういふ風に現れて居るのです。ですから前の半分はお釋迦様が迹佛としてのみ現れて居るので、これを『迹門』と言ふ。それから後の半分になると、お釋迦様が八十で滅くなつたからといつて、決して消えて無くなつたのでない。永遠の命を持つて居らつしやる三千年五千年後の今の吾々でも、心に釋尊を念へば

心の中に釋尊は活きて居られるのである。お釋迦様は永遠の命を持つて居らつしやる方だといふことがハッキリ說き示されてあります。であるから後の半分を『本門』と言ふのであります。

その迹門といふ初めの方の十四品の一番中心を成して居るものが方便品であります。十四品はどれが重い、どれが輕いといふことはありませぬけれども迹門の方では先づ方便品といふものが一番中心の柱のやうになつて居る。それから本門の十四品では、壽量品といふものが中心の柱になつて居ります。言ひ換へれば迹門は方便品を中心として纏つて居る一かたまりの法、本門の方は壽量品を中心として纏められて居る一つの敎。斯ういふ風に言へる譯であります。

この方便品は一體どういふ事を說くのが主であるかといふと、お釋迦様の一代の說法は何を目的にして說かれたかといふ、それが方便品の主要な問題であります。お釋迦様は五十年敎を說いた。そのお說きになつた事は淺いのもあり、深いのもある。非常に難しいのもあり、極めて簡單なのもあるが、その五十年間にお說きになつた敎は一體何を目的にして說いたかといふことが、方便品ではハッキリと言ひ表はされて居るのであります。それはどういふ事かといへば一切の人間を皆佛にするといふことであります。一切の人間と言へば、その中には馬鹿もあり悧口もあり、善人もあり、惡人もある。話を聽いてすぐわかる者もあるし、聽いてもなか〳〵わからない者もある。どうも惡い事ばかりして居る者もあり正直で淘に感心な心懸の者もある。けれども同じ人間である以上は、それ〴〵佛性というて、佛と成るべき性質を元來具へて居るのであります。であるからお釋迦様が世の中に出て敎を說かれたのは、善人でも惡人でも、馬鹿でも悧口でも、どんな人間でも必ず敎へ導いて結局佛とする、佛とするといふこ

とは、迷ひがスッカリ無くなつた人間として世の中に立ち、眞實の道をスッカリ辨へたものそれが佛でありますから、どんな人間でも總ての人間を皆佛にしたい。斯ういふ目的を以て敎を說いたのだといふことが極く明白に打明けられてあります。これが方便品の主なる事柄です。尙その事は本文を讀んで行く間にだん〳〵わかります。

それから本門の壽量品はどうかといふと、佛の命は無限だ、佛の命といふものは五十年や八十年で終るものでなくて、無限だといふことを說き表はされまして、さうしてたゞ佛のみならず、佛の敎を聽くお前達の命も亦限り有るものではない、無量のものである、無限のものであるといふことをはつきりと說き示された。それが壽量品の目的であります。お釋迦様はいつでも敎をお說きになる時に、御自分一人を吾々凡夫と隔てられるといふことは決して無いこれは非常に尊い所です。今私共が考へれば、自分達は淘に迷ひだらけのもので、佛様といふのは覺つた偉い方でありますけれども、その佛様が吾々に敎をお說きになる時にはいつでも言はれる。『お前達も自分も同じだ、たゞこれは覺り方の早い、遲いで違ふので、お前達でも今は凡夫だけれども、決して永遠に凡夫ではないのだ、本當に敎を求め、道を求めて行けば、自分と少しも異はないものに成れるのだ』といふことを、いつでも言つて居られるのであります。そこが私共お經を讀んで見まして、何より尊く感ぜられる所であります。

例へば高い山があつて、山の麓に大勢の人間が立つて居る。その中の一人が麓から出發して山坂を登つて頂上へ行つた。その人は元は麓に居たのだけれども、山を登つて頂上に行つたのです。他の者は何故その人の後に附いて行かないかといふと、途中の坂に樹などが一パイ生ひ茂つて、道が狹くて險しくて、山の頂上は見えない。一人先へ行つたけれども後

を附いて行つても登れるか登れないかわからない、何しろ樹が深くて行く先が見えないのでありますから、餘の者はボンヤリして驚に立つて居つて登つて行かない。その時に山の上に行つた人が大きな聲を出して、『オイ、登つて來い、自分もお前達と一緒に其處に居たが、その道を登つて來た所が今この絶頂に達したのだ。お前達の足許とこの絶頂と道は續いて居るのだから登つて來い、自分が今登つて來たことはお前達も見て居つたらう。後を附いて登つて來い、キット登れるぞ、』斯う大きい聲で叫んで呉れたとすれば、驚に居る者は初めて心丈夫になる。自分達ではわからない。道が暗いから登つて行けるか行けないかわからないのだけれども、其處を登つて行つて上に著いた人が、登つて來れば來られると言ふのだから、これは確かです。そこで驚に居る人間がそれでも疑ふ者は疑ふのです。『あんな事を言つたつて當にならぬ』と思ふ者はトウシテ居つて登らないけれどもその中の心が素直で、その大きい聲を聽いて有難いと思つた者は、その前に登つた人の歩いて行つた跡を一歩々々と踏み締めて登つて行くのであります。

それがお釈迦様と吾々との關係であります。お釈迦様がもと凡夫の相をお示しになりまして、そこからだん〳〵修行して覺りを開いて、然る後に吾々に向つて、『お前達も一つこの道を歩いて來い。お前の足許のその道を歩いて來れば自分と同じ所に來られるのだ』といふことを教へられるのでありますから吾々は凡夫で佛に成るか成れないかわからないのだけれども、併し佛に成つた方が『成れるぞ』と請け合つて下さるのだから、吾々はこれを疑はないで、一歩々々と歩いて行くより外はない。それでも疑ふと言へばそれまでの話で仕方がないのでありますが、これは疑へるものではないでありませう。

『ういふ譬でありまして、この佛の教といふものは、いつでも吾々に對して、お前達も俱にといふ態度で說かれるのであります。今から方便品をだんだん讀んで見ますと、やはりさういふ態度で說かれるお前達と一緒にこの道を歩いて、結局は山の絶頂まで到達せしめてやらうと思ふといふ、其の限り無き大きな慈悲の心持を茲に說き示されて居るのであります。

それから『方便品』といふ表題にあります言葉の意味でありますが、『方便』といふことは眞實の道に到達する方法である。ちようど梯子段のやうなもので梯子段は二階へ昇ることが目的ナンで、梯子段の途中で止まつてしまつたのでは二階へ昇れない。併しながら二階が高ければ、下から一足飛に飛び上る譯に行きませぬから、どうしても梯子段を通つて二階へ昇るのであります。佛様の御一代の教といふものは、つまり梯子段のやうなものである。低い方からだん〳〵に高い方へとその說法が進んで參りまして結局その方便が終つたときに、はじめて佛様は自分の信じて居る事を有りの儘に言はれる。そのことを方便品では言つて居るのであります。今まで說いたのはみな方便であつた、今まではだん〳〵聽く方の人の力に應じて教といふものを說いて來た、所謂『隨他意』である、『他』といふのはお釈迦様の教を聽いて居る方の人の外の人を言ふ、お釈迦様が御自分以心持に隨つて、聽く方の人の程度次第で、若しも其の人が愚かであれば淺く說くし、向ふの機根が良ければ深く說くといふ風に、相手の心持次第で說いて居つた。それが即ち方便である。所がさういふ教を永い間說いて居つて、モウ一通り說いてしまつたから、これからは『隨自意』といつて、佛様御自身の心持の通り、自分の覺つた所をその儘に打明けて話さうと言はれる。それが所謂眞實の教であります。その態度を方便品でハッキリと說き示されたのであります。今まで四十何年話した事は方便であつた、

これからが本當の自分の心持を打明けるのであると言はれる。

さう申しますと、それなら方便の敎といふものはつまらないものだといふ風に思ふ人がありますが、それはいかぬ。そこを通らなければ眞實の所に來られないのだから、方便の敎だつて尊いのです。例へば東京から京都へ行くのに京都行の切符を買つて汽車に乘ると、その汽車は横濱も通れば大船も通る、沼津も通れば靜岡も通つて行く、名古屋も岐阜も通つて行く。その名古屋とか岐阜とかいふ所で降りてしまつて、それつ切り先へ行かなければ、京都へ行くといふ目的は達せられない。併ながらその靜岡とか、名古屋とか岐阜とかを通らないで京都へ行くことは出來ない。だから京都まで行つて振返つて見れば横濱を通つたことも、名古屋を通つたことも皆尊い。若し京都に行き著かないで途中で止まつてしまへば、何處もまるで無意味になる。吾々の修行もその通りで、佛樣の敎は極く低い所から始まるが、その低い所が皆價値が有る。低い所からだん〳〵深入りして行つて、だん〳〵本當の所に入つて、結局は佛樣と同じものに成れる。その佛樣と同じものに成れるといふ見込が附いて見れば、低い方の敎は少しも卑しむべきものではない。そこから一歩々々進んで行かなければ高いところには行かれない譯です。それを『俺は佛に成るんだから、そんなつまらない事はどうでも宜い』といふ風に考へてしまふならばそれは自惚れた人間であつて、とても本當の偉いものには成れない。東京驛へ行つて切符を買つて『俺は京都へ行くんだから、途中を通らないで飛んで行くぞ』と言つて見ても、それは駄目な話で、やはり京都へ行くには途中を通らなければならないのです。佛に成るといふこと、佛と同じになるといふことはそれが究極の目的でありますけれども、さうなる爲には一歩々々と凡夫の境界から離れて、さうして修

行を積み、努力を重ねて行かなければならない筈であります。

幾度も申しますけれども、骨折を惜んで人間が善いことが出來るものではない。凡夫から一足飛に佛に成るといふことは出來ない。所が佛敎にうまい言葉があるものだから時々それを間違へる。例へば『即身成佛』といふ言葉がありますが、こんな言葉を聽いて自惚れる人が往々ある。即身成佛だからこの身がすぐ佛に成るのだと思ふ。併し幾ら夢中になつて題目などを唱へて見たつて、すぐ佛に成るものでない。この『即』といふ字は一體『すぐ』といふことではない。即の字は『不離』と言つて離れないといふ意味です。即身、この身を離れずして、この肉體を離れないで、この肉體を持つた儘であつても、だんだん修行を積んで行つて迷ひが無くなれば佛に成れるぞ、斯ういふことが即身成佛といふことであります。人に依ると、現世では迚も佛に成れない、現世で一度死んで、極樂とかいふ所に行かなければ佛に成れないといふやうなことを信じて居る人もあるけれども、さうではない。心の持ち方一つに依つては、この肉身を離れずして、この身を持つた儘でも佛に成れるぞといふことが、即身成佛といふことであります。つまり心の問題です。心さへ佛と一致するやうになれば、いつでも佛に成れる。即の字はすぐにといふ意味ではない。そこを間違つてはいけない。これは今までの敎へ方が或は惡いかも知れないのですが、すぐ成れるやうなことを言ふ人もある。實際やつて見ると成れはしない。『即』の字を即席といふやうに考へて、即席御料理、さういふものだと思つて居る。料理の方は即席が出來るけれども、成佛は即席成佛などは出來はしない。料理でも即席料理ナンといふのは間に合せで、本ものではない。修行の方は間に合せではいけない。やはり一歩々々と進んで行つて結局佛に成る。斯ういふ事を忘れてはなら

ないのであります。併ながら有難いことには吾々はこの肉身を持つて居つて、肉身を捨てないでも、心さへ佛樣と同じになれば佛に成れる。その活きた手本をお示しになつたのがお釋迦樣であります。お釋迦樣が三十で覺られて佛に成られた、この事實ほど尊いことはない。今この方便品を讀んで見ますと、お釋迦樣が御自身に身を以てお手本をお示し下さつて、さうして一切の人間を皆同じ道に入れて、今の所は凡夫であつて迷ひだらけの人間であるけれども、それをだん〳〵と敎へ導いて、お釋迦樣御自身と同じやうな境界にまで到達せしめよう。これが世の中に出て敎を說いた目的であるといふことが極めて明白に言はれてあります。そこに大變な尊さを感ずるのであります。

大體の說明はこの位にして置いて、本文を讀んで參りませう。

爾の時に世尊三昧より安詳として起ちて、舍利弗に告げたまはく

（爾時世尊、從三昧一、安詳而起、告二舍利弗一）

今まで序品の所では、お釋迦樣が何も仰しやらないたゞお釋迦樣のお身から美しい光が出たのを見て、不思議に思つて大勢の人々がそれに就いていろ〳〵話をして居つた。就中文殊菩薩の說明が一番徹底的であつて、大衆が文殊の言ふことを聽いて、それではこれから佛樣が自分達に最後の敎とも言ふべき所の、佛樣御自身が覺つた所をその儘に打明けて說かれるのであらう。斯ういふ期待を有つて、皆が一生懸命になつて坐り直して聽く準備をして居つた所です。

その時に世尊が三昧より——三昧といふのは靜かにじつと落着いて、身動きもせずに考へて居らつしやつた。その狀態から安詳として起つ。安詳はやすらかといふことで、洵に悠然として立上つて、これから大勢に敎へを說かうといふ計畫が十分立つて居る

から、少しも慌てず、少しも騷がず、安らかな心持でお在でになりました。さうして舍利弗に告げたまはく。舍利弗といふ弟子は智慧第一と言はれまして お釋迦樣の弟子の中でも殊に勝れた人であります。その舍利弗にお告げになつた。

諸佛の智慧は甚深無量なり。

（諸佛智慧、甚深無量）

佛といふものは、無量の智慧を具へて居る。『諸佛』とありますが、佛といふものは一人ではない、佛といふのは覺つた者といふ意味でありますから、本當に人生の意義を覺り盡せばそれが佛である。ですから佛は幾人もある譯です。そこでその佛樣の有つて居られる智慧といふものは甚深無量なり、非常に奧深くして量り知られないやうなものであるといふのです。

『智慧』といふ言葉は、若し分けて言へば『智』と『慧』と分けられる。智は有、即ち差別の方を詳しく觀る力、慧は空即ち平等の方面を詳しく觀る力です。『大乘義章』といふ書物には、

『照し見るを智と名け、解し了るを慧と稱す』

と言つてあります。照し見るといふのは、一つ〳〵の細かい事をそれ〴〵照し見る、即ち差別の方です、能く觀ると世の中に有る物は皆異ふ。獨逸のライプニッツといふ哲學者が言つたやうに、木の葉一枚だつて同じ形をしたものはありはしない。同じやうに見えるけれども、比べて見れば何處か異ふ。これは人生の本當の一面です。異ふと言へば皆異ふ。これだけ大勢お集りになつた皆樣でも、顏が何處か異ふそつくり同じ人はありはしない。又そつくり同じだつたら困るでせう。往來で會つてもどつちの人だかわからない。異ふから宜いのでせうが、皆異ふ。木の葉一枚だつて異ふ。紙を一帖買つたつて、ソックリ同じものはありはしない。その世の中の異つて居

ることに就いて、一つ〳〵その異ひを詳しく知るといふこと、これが所謂有といふ、差別を知ることである『照し見るを智と名く』といふのはそれです。これは非常に必要なことであります。人間は、物の異ひがわからないでは仕様がない。賢い人といふのは物を知り分ける力の有る人であつて、分けるといふことは非常に必要なことであります。併ながら分けてばかり居てはいけない。いろ〳〵異ふけれどもその異つた中に通じて平等な異はない物があるといふことを考へなければいけない。此處に居る大勢の者の顔つきは皆異ふけれども、上の方に眼があつて眞ん中に鼻があつて、下に口があるといふことは一致して居る。縹緻の美い醜いはあるけれども、縹緻が美くても醜くてもそこは一致して居る。『どうも非常に不縹緻な子供が生れて額の眞ん中に口がある……』そんなのはありませぬ。やはり口は下にあるにきまつて居る。だから異ふと言へば皆異ふけれども、その異ふものを比べて見ると、そこに異はない一貫したものがある。その一貫したものを確かりと捉へるといふことを空と言ひ、或は平等と言ふ。『解し了る』といふのは、大體を確かり捉へることでそれを『慧』と名ける。

これは兩方なければいけないので、佛教で教へることは、決して迂遠な、活きた人生を離れた事を教へるものではない。細かに言へば一つ〳〵皆異ふから、その異ふ所を一々細かに分別することも必要だけれども、又異ふ方に執はれてしまつてはいけない、そこにその異つたものを一貫して異はないところの永遠に變らないものがあるといふことを確かり捉へる。これが大事であります。その兩方を合せて『智慧』と言ふ。差別の方ばかりを見て居ると、どうも人間がいつでも心が忙しくて、唯々その日〳〵を追ふやうな碌ない氣分になる。それから平等の方ばかりを見て居ると、活きた人生と無關係な事ばかり考へて所謂空理空論、たゞ夢を見て居るやうな一生を終らなければならぬ。ですからいつでも兩方面を見なければならぬ。その兩方面を完全に具へたものが所謂智慧であります。

佛の智慧は、全くさういふ兩方面を包容して、而も缺ける所が無い。であるから『諸佛の智慧は甚深無量なり。』非常に奥深くして限り無き所の智慧を具へて居らつしやる。

其の智慧の門は難解難入なり

（其智慧門、難解難入）

左樣に佛樣の智慧は勝れて居るけれども、その佛樣の智慧で考へた事をいきなり人に教へたつてわかる筈はない。それだから相手の力に依つて、モット低い所からだん〳〵に教へ導いて、結局佛と同じ智慧に入れる。それが方便です。その方便のことを『智慧の門』と言ふ。だん〳〵智慧に入つて行く門で、即ち佛の方便の教です。いきなり佛樣が自分の覺つた所を仰しやつても、吾々は凡夫だからわかりはしない。ですからそこはモット低い所、吾々の手近な所、わかり易い所からお說き下さつて、それからだん〳〵奥へ入つて行くと、結局は佛の覺つた所まで行ける。ですから方便の教といふのは智慧の門である。佛の教に入る門であります。

所がその門は、佛樣の方は、チョウド高い所から低い所に居る人間を見るやうな譯で、あの『人間にはこれが宜からう』と言つて、皆適當な教を與へて下される。けれども聽いて居る方ではわからない。そこでその智慧の門は難解難入なり。佛樣は適當な教をお與へ下さるけれども、聽く方から言ふと、どうしてさういふ教をお與へ下さるか、これは何の目的でさういふ教をお與へ下さるのだかといふことがわからない。それは修行して覺つて見なければわからない。

それですから『信解』といふことが非常に大事で

あります。解する、理解するといふことは、信が加つて初めて本當にわかる。たゞ一通り理窟がわかつたといふのはまだ本當にわかつたのではない。その教へられた事を信じて『成程さうだ』と魂を打込んでやつて見て、自分が身に聊かなりともやつて見た時に、初めてその本當の意味がわかるのである。だから信と解と伴はなければ理解するといふことは出來にくい。初めからわかるものではない、その智慧の門は難解難入なり。たゞ智慧でわからうと思つてもわかるものではない。けれどもだん〳〵聽いて居れば、なんだか自然々々にその佛樣の力が自分の心に泌み込んで參りまして、よくはわからぬけれども『有難い、尊い』といふ氣分になつて來ると、その尊いといふ氣分に依つて助けられて、今までわからない事がだん〳〵わかつて參ります。

それで私は若い方に特に申上げたいのですが、今のやうな時代で教育を受けて居りますと、初めから信ずるといふことは無理です。私共學生に始終言ふのですが、それは無理です。年寄は昔からの習慣で初めから佛壇に向つて掌を合せる癖が附いて居るから『ア、有難い』と言ふけれども、若い者は學校へ行つて、小學校から中學校、皆物を疑ふことを教へられて居る。殊に數學などは疑ふ事ばかり教へる。『これはどういふ譯だ』『假にこれが出來ないとすれば』ナンと言つて幾何學などはやる。中學校などでは皆疑ふ事ばかり教へて居る。『どういふ譯だ、モット疑へ、モット疑へ』と教へる。だから疑ふ癖が附いてしまつて居る。マアそれは惡い事ではないが、さういふ習慣を有つて居る者に向つて、初めから信じろと言つてもそれは無理です。私なども白髮が生えて年寄の氣分になつて來ますが、年寄は氣が短くてどうもいけない。『お前は日本人だ、日本の國を有難いと思へ』『何故有難いのですか』『何故でも有難いのだ、何故ナンと言ふ奴は日本人ぢやないぞ』と

言つて怒鳴りつけてしまふのですけれども、それはいけない。今の若い人は子供の時から疑ふやうな癖が附いて居るのだから、さういふ人間に向つて初めから信じろと言つてもなか〳〵さう行かないのであります。初めはどうせ疑ふのですけれども、前にも言つたやうに、香のあるものに手を觸れて居ればいつか香がうつる、冷たい物に觸つて居ればいつか手が冷たくなる。熱い物に觸つて居ればいつか手が熱くなると同じやうに、疑ひでも宜しい、研究でも宜しい、何でも宜しい。佛の教といふものは尊いものだ、この尊い教に觸れて居れば、初めは疑ひであつても、初めは研究的であつても、知らず識らずの間になんだか有難い、何となしにその力が響いて來るさうなると今まで疑つて居つた事が自然に、理窟の上ではなく、信ずる情と相俟つて解けて行く、そこまで辛抱しなければいけない。一足飛にはなか〳〵出來ない。

吾々の知つて居る學生なども能く言ふ。『信仰といふものは大變尊いものださうですが、どうも僕は信ずる氣になれない、どうしたものだらう、どうしたら早く信ぜられますか、先生、あなたはどうして信じたのですか』などゝ言ふ。併しさう氣が短く行くものではない。それはだん〳〵に行くのです、そんなに初めから信じようと言つて無理にやつてはいけない。初めから信じたい〳〵と思ふとこだわれてしまふ。よく寝られない時に『寝たい〳〵』と思ふとどうしても寝られなくなつてしまふ。おかしなものです。さういふ時には寝たいと思はないで、たゞじつとして居ると寝られる。『どうかして寝たいものだ、まだ寝られないか、まだ寝られないか』と思つて時計などを見て居ると、到頭明け方まで寝られないものです。それと同じで、早く信じたいものだ、どうして信じられないかとイラ〳〵すると結局信ぜられない。だからそんなに急ぐには及ばない。佛樣の教

は非常に大きな力がある。だから疑ひでも宜しい、研究でも宜しい、何でも宜しい。それに觸れて居りますと、佛樣の力が自然々々に心に泌み込んでモウ疑ひ無いやうになつて行く。それまでは研究的でも結構、或は攻擊する積りでも結構、なんでも宜い。兎に角眞面目な心持で觸れて居りさへすれば宜い。決して急いではいけない。お釋迦樣のやうな頭腦の良い偉い方でも六年の間難行苦行をして漸く覺られたのですから、吾々のやうな頭腦の惡い者が、一年や二年で覺らうナンといふのは、それはあまり虫が好過ぎる。そんなに急にわかるものではない。だん〳〵にといふことを考へなければいけない。

この頃は世の中が忙しいものですから、どうも人間が氣が短くなつて、何でも早くわかつて、早く信じてしまはうと言ふけれども、なか〳〵さう行かない。そんなに早くやつたら縊死る。一歩々々とやつて行くより仕方がない。私共の友達にも時々そんな事を言ふ者があります。會などをやつて牛肉などをつゝいて一緒に話をしますと、『小林はこの頃佛教の事をやつて居るから、一つ此處で佛教の話をして貰はうぢやないか、三十分ぐらゐで佛教の大體を話して呉れ』と言ふ。私は『それは駄目だ、そんな馬鹿な事があるものか、お釋迦樣が六年掛つて覺つた事を、ビールを飲んで牛肉を食ひながら三十分で知らうナンといふ、その料簡がいけない。緩くりやらなければ駄目だ』と言つて居るのでありますが、さういふやうな譯でなか〳〵難解難入であります。初めはどういふ風にしてこの教が說かれたのだか、その意味はどうだといふことは、なか〳〵本當に理解することは難しい。又そこへ入り込んで行つて自分のものにするといふことも難しい。けれども努めて息まなければ、初めから信仰を堅くしようナンと焦らなくとも、佛樣の教そのものには、佛の魂ひが打込

まれてあるのだから、自然々々にこれが心に泌み込みまして、いつとはなしに信ずるやうになつて行くのであります。

たゞ望むことは眞實の心持です。これは私はいつでも言ふ。自分で自分を欺いてはいけない。斯ういふ宗教の會合などに動もすると有り勝のことは、自分で自分を欺くことである。有り難くないけれども有難いナンと言つて見る人がある。それだから茶話會などを開くには餘程用心しないといけない。誰か感想を話せと言ふと『どうもこの會へ參りましてから、洵に有難くて悅びに滿ちて居ります』ナンと言ふ。ナーニそれで昨夕夫婦喧嘩などをして居つた人がある。嘘を吐いてはいけない。そんなに一月か二月で悅びに滿ちた心持になれるものではない。芝居をしてはいけない、嘘を吐いてはいけない。眞實の心持で行かなければならない。わからないならわからないで宜い、信ぜられないなら信ぜられないで宜い。さうして何か興味があり、何か考へがあるなら、確り捉へて、わからない所はわからないで幾らでも求めて行く。その内に自らわかるやうになつて來る。初めから己れを欺いて、信じたやうな顏をするとか有難いやうな事を言ひ出すといふことになると、それは芝居をして居る譯でありまして、まるで意味が無い。話は少し脫線致しますが、皆樣はどうかさういふことの無いやうにお願ひしたいと思ふ。私共宗教の會に行つて一番不愉快なのはそれです。ちきにそんな事を言ふ人が出て來る。『どうもこの會へ來ましてからまるで氣分が異つて參りました』などと言ふ。そんな筈はない、そんな嘘を吐いて居る、それはいけない。眞實の心持でなければどうしたつて捉まるものではない。實際難解難入です。お釋迦樣の仰しやる通り初めから成程とわかるものではない。

けれども何だか斯う引張られて行くやうな心持がす

る。それで宜しい。引張られて行けばいつの間にかわかつて行く、『この頃は俺も大分覺つた』ナンと言ふのは怪しい。それは神經衰弱です。覺つたつもりで道を歩いて居ると、自動車にぶつかつて大怪我をしたナンといふのが能くあります。あまり急に覺つたのは危い。確に難解難入で、初めからわかるものではない。

一切の聲聞辟支佛の知ること能はざる所なり。

（一切聲聞、辟支佛、所不能知）

聲聞、辟支佛は、前に申したやうに、世の中の無常を感じて世間に執はれない心持を有つた人々を言ふのでありますが、さういふ事だけやつたのでは知ること能はざる所だといふのは、佛の心持を以て自分の心持とすることを心掛けて、さうして少しでも實行を努めて見る、そこで初めてだん〳〵わかつて行くのである。聲聞、辟支佛といふやうな、世の中の無常を感じて世間に執はれなくなつて、自分一人行ひ澄して居るといふやうなことをやつて居つたのでは、いつまで經つてもわからないのです。それですから、理窟ばかり捏ねて居つたら一生涯わかりはしない。實際にやつて見るのです。佛樣は大きな慈悲心をもつて一切の人間に臨んで居られるのですから、佛樣のなさるやうな事をやつて、世の爲人の爲に力を盡して情をもつて人に對ふといふことを、自分でやつて見たときに、はじめて『成る程こゝだナ』といふことがわかる。その實行を努めないで、たゞ己れを潔くしてツンと澄して居つたのでは、いつ迄經つてもわかりはしない。

所以は何ん、佛曾て百千萬億無數の諸佛に親近し、盡して諸佛の無量の道法を行じ

（所以者何。佛曾親近、百千萬億、無數諸佛、盡行諸佛、無量道法）

それは何故かといふと、どんな佛でも、曾て百千萬億無數といふやうな數限り無い佛樣に近いて親んで

さうして『盡して』といふのは、自分の心の力、身の力を殘らず打込んで、佛樣のお敎へになつた事を實行して覺つたのだ。

『盡して』といふことは、少しも力を弛めないといふことで、これは非常に善い言葉です。私共は盡してといふことがなか〳〵出來ない。題目を唱へるのでも、吾々のは本當に唱へて居るのではない。唱へて居る積りだけれども、他の心持が雜つて居る。あなた方はどうですか、お經を讀んだり、題目を唱へたりして居つて、本當にお經を讀んで居られるか題目を唱へて居られるか、自分で振返つて見ると出來はしない。佛樣に向つて掌を合せて一生懸命になつてお經を讀んで居る。一生懸命になつたら他の事は耳に入らない、眼にも入らない筈であります、ブウ〳〵といへば『ア、自動車が通るナ』といふやうに心が動く、チリン〳〵といへば『號外が出たナ』……すぐ心が動く、喇叭の音がすれば『ア、豆腐屋が來るナ、十二時頃だナ』……そんな事を考へて居る。お經を讀んで居るのでもなければ、題目を唱へて居るのではない。心の中にいろ〳〵な事が雜つて居る、それではあまり功德が無い筈です。『俺は三年法華を信心したけれども少しも功德が無い、モウ廢めた今度は念佛だ』……といふやうなことを言ふ人があるけれども、そんな心持で、心があつちへ向いたり、こつちへ向いたりしてやつて居つては、三年やつても五年やつても大きな事の出來る譯がない。心が打込まれなければ大きな事は出來るものではない。でありますから、佛樣がそのモット前に覺つたといふ佛樣に就て修行される時には、盡して佛の無量の道法を行する、本當に全力を打込んで佛樣のお敎へになつた事を實行する。行ずるとありますからたゞ考へるだけではない。自分の身に行ふことに努めるさうして初めてだん〳〵と覺つて行のであります。

勇猛精進して、名稱普く聞えたまへり。

（勇猛精進、名稱普聞）

勇猛は心に畏れなく、精進といふことは雜りの無い心持を以て進むこと、この精進の『精』の字が非常に必要であります。雜つた心持ではいけない。なにか利害損得とか、人に見られたいとか、人に知られたいといふやうな心持が雜つて居ると、それはモウ結局自分の信心を鈍らせることになる。だから精進でなければいけない。雜らない心持を以て進んで行かなければならぬのであります。

私が學校を出て間も無い頃でありますから、大分舊い話でありますが、上野の不忍池の側で、都下のいろ〳〵な學校の聯合で徒歩競走があつた事がある。私は自分では走らない方だけれども、さういふ事に興味を有つて居るから見に參りました。所が一番終ひに、何哩競走といふのか忘れましたけれども、不忍池の周圍を二度駈け廻るのがあつて、それで勝負が決する、一番最後の呼び物の競走であつた。これが一番興味が有るので一生懸命見て居りました。何でも選手が七八人で駈け出しました。さうすると半頃までは一番終りではないが、一番先頭でもない、中位な所に居つた選手が半頃からズン〳〵と他の者を拔いて到頭一番先頭になつてその人が一等になつた。實に美事なものだといふので、その人の周圍へ一パイ集まつていろ〳〵な感想を聽いて居る。私もノッ〳〵行つて聽いた『どうしてあなたは勝つたか、勝つた時の心持はどうだ、どうぞ話して呉れ』さうするとその選手が言ふには『別に感想といふものは無いけれども、駈け出す時には勝ちたかつた。勝ちたいと思つて駈けて居る時は、どうも他の人が自分を拔きさうで氣持が惡い、又一人拔かれた……自分より前へ行く者があると非常にそれが心配で、駈けて居る間に二人も三人も自分を拔いて先へ行く者があると心配で〳〵ならない。それから途中で考へ直した。並もこれでは勝てはしない、勝敗はどうでも

宜い。けれども折角駈け出したものだから、駈けられるだけ駈けて見よう。どの位駈けられるかわからないから、勝つても敗けてもかまはない。駈けられるだけ駈けて見ようと思つて、今度は人が前へ行かうが後にならうがそんな事はかまはないで、たゞ一心に足を動かして駈けた。さうして誰をどう拔いたかわからなかつたけれども、ワッといふ聲が聽えたので氣が附いて見たら、決勝點へ入つて居つて、お前が一等だと言はれて吃驚した』斯ういふ話をして居りました。私は『これだナ』と思ひました。勝たうと思つて、彼奴が先に行つた、彼奴が後になつたと思つて居つてはいけない。後も先も忘れてしまつて駈けられるだけ駈ける。周圍の人間は眼中に置かないで、たゞ一心に駈ける。それが本當にその人を勝たせたのだといふことを知つて、これはマア運動上の話でありますけれども、私は非常な教訓を得たやうな氣分が致しました。今でもその事を覺えて居るのであります。

それが本當の『精進』といふものであります。雜氣の無い心持を以て前へ〳〵と進む、人に勝ちたいとか、彼奴がどうだとか、此奴がどうだといふことを考へて居つたのでは、本當の事が出來るものではない。『勇猛精進』、たゞモウ驀地に利害損得を捨てゝ爲すべき事を爲し、學ぶべき事を學ぶ、斯ういふ風にやつて行くと『名稱普く聞え』で、結局その人が一番勝れた人になるから、その名前が普く世の中に聞えるやうになる。

甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨ひて說きたまふ所、意趣解り難し。

（成二就甚深、未曾有法一隨レ宜所レ說、意趣難レ解）

さうして『甚深未曾有の法』、非常に奥深い、未だ曾つて例の無いやうな尊い教をスッカリ覺りまして、然る後に『宜しきに隨つて說きたまふ所』自分が覺つた後に相手の機根を見て、世の中に應じて說く、

向ふの人間の力に合せて説く、『意趣解り難し』しかし何處を目的に説かれるかといふことは、當の佛樣より他の者はわからない。なんだか知らんが皆適切な事をお説き下さる、併し何處を捉へてあんな教を説かれるか、その捉へ所といふものは當の佛樣以外の者にはわからない。

そこでチョット申して置きたいのは、『方便』といふことを世間の言葉で『虚僞』と一緒にするのでありますが、方便と虚僞は根本から異ふのであります方便といふのは、向ふの人の力を測つて力相當に説いて、さうしてだん〳〵わからせて、結局本當の所まで引張つて行かうといふ。これが方便です。所がその方便の途中に於ては本當でない事を言ふ。初めから本當の事を言つては少しもわからないから、本當でない事を言ふ、そこで方便と虚僞の境がわからなくなつてしまふ。俗語では『嘘も方便』などゝ言ふけれども虚僞と方便は異ふ譯です。何處が異ふかといふとそれはハッキリわかる。

方便……爲彼
虚僞……爲己

方便といふのは向ふの人の爲にする、虚僞といふのは自分の爲にする。だから形は同じいかも知れぬけれども精神がまるで異ふ。それでハッキリわかる。向ふの人の爲と思つてやるのは方便、自分の爲と思つてやるのは虚僞です。例へばお母さんが林檎を三つ持つて居る。それを子供にやる時に、子供に二つやつて一つ隠して置く。さうして『二つきりないョ』と言つてやる。三つあるのを二つきりないと言ふのですから眞實ではない、虚僞です。所がその『二つきりないョ』と言ふのはどういふ積りで言ふのかといふと、三つ食べさしては腹を下すと思つて、子供の爲を圖つて『二つきりないョ』と言つて二つやつて、明日になつたら殘りの一つをやらうといふならば、それは子供の爲を圖つて居るのでありますから

方便です。三つやればキット腹を下すにきまつて居る。だからこれは方便です。所がさうでなくして、三つやるのは惜いから、『二つきりないョ』と言つて置いて、後で自分がこつそり一つ食べようといふことになれば、自分の爲だから虚僞の方になる。虚僞と方便といふものは新ういふやうにチャントわかる虚僞といふのは自分の爲にする、自分を捨てた時には、眞實の事を言はなくても、それは方便になつて行く。

佛樣の方便はそれです。これは後に出て來ますがどんな事を言つても虚僞ではないぞ、虚僞とは異ふぞといふことを釋尊がハッキリ言つて居られるのはそれは、つまり一切衆生を救つて彼等を覺らせようといふつもりで言つて居られるのでありますから、佛のお心持を打明けられなくても、それは虚僞ではない。方便であるといふことになる譯であります。世間では『嘘も方便』などゝいふ變な言葉を使つてごつちやにして居るのであります。佛樣は本當に方便で、誠心を以て衆生を教へ諭して居らつしやる。そこで『意趣解り難し』他の者にはどういふ譯であいふ事を仰つやるのだかといふことの意味がわからぬだらう。

舍利弗、吾成佛已來、種々の因緣、種々の譬諭をもつて廣く言教を演べ、無數の方便をもつて衆生を引導して、諸の著を離れしむ。

（舍利弗。吾從二成佛一已來、種種因緣、種種譬諭、廣演二言教一無數方便、引二導衆生一、令レ離二諸著一）

舍利弗よ、總ての佛はこの通りであるのだから、自分も成佛して已來、佛陀伽耶の菩提樹の下で覺りを開いてから已來、種々の因緣、種々の譬諭を以て廣く言教を演べて、無數の方便を以て衆生を引導した。

『因緣』といふのは使ひ方が種々ありますが、此所では過去の事實のことを言つて居ります。いろいろな事柄を以て説明する。これを種々の因緣と言ふ、

どうも理窟だけでは能くわからない。本當に慣れた人は理窟を言つてもわかるけれども、初めて聽く人には理窟だけではどうもわからないから、昔斯ういふ事があつた、誰が斯ういふ行ひをした、誰がこんな事をやつたといふやうに、種々の事實を擧げる。又種々の譬諭を以て『言教』は口で言ふ教、教といふものは口で言ふばかりでないけれども、併し言葉を通じてとなければ教には近づけませぬから、先づ言葉で教を演べます。さうして數限り無いところの方便を以て大勢の人間を引導した。

『引導』といふのは、引出して導き入れるといふことであります。引き出しただけではいけない。引出すといふのは迷つた中から引出す。導き入れるといふのは覺つた境界に引き込む。それを併せて引導と言ふのです。皆迷つて居る。その迷つた中から引張り出さなければいけない。迷つた儘では仕樣がない、迷つた中から引き出して、今度は覺つた方に伴れ込む。丁度譬へて見れば、二つの部屋があつて、一方の部屋は明るく、一方の部屋は暗い、その暗い部屋に居る人をその部屋から伴れ出して、さうして明るい部屋に入れる。さういふ風に暗い方から引出して明るい方に導き入れること、それが引導であります。だから引導といふのは人間を教化する、教を與へる事です。この頃は死ぬ時に引導をすると言ふけれども、死ぬ時では遲い。生きて居る時に引導しなければいけない。皆迷つて居るのだから、その迷つた人間を迷ひの中から引張り出して、さうして悟つた方に入れてやらなければ役に立ちはしない。死ぬ時に慌てゝ引導しても仕樣がない。どうもこの頃は言葉の使ひ方が間違つて居ります。死ぬ時に引導を渡すと言つたり、或は貴樣の家は借金が多くて今日限り潰れるぞといふやうな場合に『引導を渡してやる』などゝ言ふ。それではいけない。引導といふのは迷つた中から引出して悟つた方に入れることであります。

引導して諸の著を離れしめる、『著』は執著、愛著といふやうに、自分を中心に物を考へる時に著と言ふ、こびり附いてしまふことを言ふ。愛著と言ふ愛するのは惡いことはない、著が惡い。子供を愛するといふ、それは善い事です。親が子供を可愛がるのは少しも惡いことはない。所が愛著がいけない。自分の子供は可愛い、隣りの子供はどうでも宜い、だから喧嘩をした時には家の子供の肩を持つて『隣りの子供を虐めてやれ』……となる、愛が惡いのではない、愛著が惡い。花が綺麗だと言つて愛するのは宜しい、愛著が惡い。花が美しいから、これを持つて歸つて俺の家の庭のものにしようといふ。それだけではつまらないから、垣根を圍らして人に見せないで一人で見てやらうとなつて來る。人間といふものは實に著が恐しい、この著といふものは貪りと惜みといふ二つの方面に向ふ。他の物は自分の物にしたい、自分の物は人にやりたくないといふことになる。

私は新宿の通りを始終歩きますが、彼處で活動寫眞館のビラを配つて居る。あんなものは誰も見はしない、すぐ棄てゝしまふ。棄てゝしまふのに、前の人にやつて自分に呉れないと『オイ、呉れ』と言ふ。貰つて何にするか、すぐ棄てゝしまふ。それなら貰はなければ宜いのに、人にやつて自分に呉れないと不愉快になる。兎に角貰つて見る。貰つたつて役に立たない。實に人間といふものは客な料簡のものです。役に立たなければ貰はなくても宜さうなものだけれども『オイ、どうして俺に呉れないのだ』と言つて貰ふ。これは貪の方です。又惜むといふことも隨分ひどい。自分の物だとなつたら人に分けてやりたくない。これもよく見る事でありますが、電車の

中で夕刊を見て居る。隣りの人が覗くと、キット斯うやつて隠す。隠さなくても見せてやつたら宜さそうなものだ、別に減るものではない。所が『俺が一錢五厘で買つた』と思つて居るから、隣りの人に見せない。斯ういふのが執著で洵に情けないことです。

それが大きい事、小さい事、總てにある、政治上の事にしても社會上の事にしても、甚しきになれば國と國との關係でもさうなつて行く。でありますからその執著といふことが恐しいのであります。その著を離れさせれば宜しい。そこで佛は大勢の人間を引導して、その迷つた狀態から引出して覺りの境界に入れる。さうしていろ〳〵な著を離れしめる。

所以は何ん、如來は方便、知見波羅蜜皆已に具足せり。

（所以者何。如來方便、知見波羅蜜、皆已具足）

どうしてさういふ事が出來るかと言へば、如來（佛様）は方便、即ち一切の人を教へ導くことを知つて居る。

知見波羅蜜――『波羅蜜』といふのは梵語で、譯して『度』といふ、『わたる』といふ意味であります。

川があつて、彼岸（向ふの岸）と此岸（こちらの岸）とある、彼岸は悟つた人、此岸は迷つた人、此岸は凡夫彼岸は聖者です。そこで迷つたこちらの岸から、悟つた向ふの岸へ行かなければならない。凡夫の迷つた境界から、聖者といふ悟つた境界に行かなければならない。それには此の川をわたらなければならない、そのわたる方法が所謂『度』です。迷つた境界を離れて、さうして悟つた境界に到達するさま〳〵な手段方法を、みな『度』といふ。勿論それは佛様の教に依らなければなりませぬ、けれども教があつた

つて、それを實行しなければ教は役に立たぬから、その教を實行して行く、それが度であります。

そこで知見波羅蜜といふのは波羅蜜の一つで知見といふのは、自分が總ての物の本當の性質を見極めて行くことです。物がいゝ加減に見えて居つてはいけない。總ての物を本當に見て行く。本當に見て行くといふことはどういふ事かと言へば

空……平等觀
假……差別觀
中……統一觀

の三つの方面を完全に具へたものが本當の知見です。これは前に智慧といふことに就て申した事と聯絡して居りますが、私共が物を見る時には、先づこの三つの見方をしなければならぬ。『空』といふのは平等のこと、『假』といふのは差別のこと、『中』といふのはそれを纏める見方、斯ういふ三つの見方をする。先づ平等觀といふものが必要である。同じ所を見る前にも申したやうに、皆様がお集りになつて居るが皆人間といふものは同じ顔をして居る。眼があつて鼻があつて口がある。樹が澤山あるけれども根があつて、幹があつて、枝があつて、葉がある。皆同じだ。人間も馬鹿もあれば悧口もあり、善人もあれば惡人もあるけれども、結局修行次第では佛に成れる。これは同じだ。斯ういふやうに總ての物の平等の所を捉へて能く見るといふことが空といふ見方、これは平等觀であります。『空』といふのは何も無いことだと思つてはいけない。よく佛教を生嚙りするとこれを間違へていけない。『諸法皆空』といひ、『色即是空』などゝいつて、空の字を書いてあると、『何も無くなつてしまふのが善いのだナ』と思ふ。そんな風に空の字をスッカリ無くなしてしまふことだと考へるのは飛んでもない話である。空といふのは差別を離れた意味で、即ち平等觀であります。みな同じだといふ所に眼を着けて行くのであります。

それから同じだと言つてもまるで同じものではないのでありますから、そこに異ふ所をみる。お濠の側の松の木と鉢植の松の木とは、松の木だといふことは同じだけれども、枝振が異ひ、根の大きさも異ふ。人の顔でもさうです。あの人もこの人も人間の顔だけれども何處か異ふ。鼻つきが異ひ、眼つきが異ふ、全く同じ人間といふものは無い。その異ふといふことはなにも夢ではない、現實の事柄でありますから、その事はその事で確りと見なければいけない。この方をハツキリみるのが假といふ見方、即ち差別觀であります。若しこの差別を知らないで空の方にばかり執はれるならば、それは大間違ひである。斯ういふのを天台大師の言葉でいふと惡平等といふ。それから平等の方を少しも見ないで、たゞ差別の方ばかり見て異ふ〳〵と言つて居るのを惡差別といふ。惡平等と惡差別はどちらもいけない『同じだ同じだ、何でも同じだ』と言ふ方は惡平等です。それから『そつくり同じものはありはしない、異ふ〳〵』と言つて、むやみに異ふ方ばかり言ふ、金の有る人と無い人とは異ふ、智慧のある人と無い人は異ふ、身分の高い人と低い人とは異ふ……異ふ方ばかり考へて、人間が人間として共通に有つて居る性質をまるで見ないといふことはいけない。それは惡差別である。そんな事ばかり考へて居つたら、世の中は始終喧嘩鬪爭の絶間が無い。平等の方面と差別の方面と併せて見ることが必要である。前にも申したやうに、親が子供を愛することは平等である。併ながら十八の子供と二つの子供とは同じ物を食はせる譯に行かない。十八の子供には饅や刺身を食べさせる、二つの子供には乳を飲ませる。その待遇には差別がある。その差別の待遇といふものは平等の愛情から出來る。その差別の待遇をしないで、『面倒くさいから皆同じ物を食はせて置け』といふのは、愛情の無い親である。教もその通りです。本當に平等の心持を有

つならば各が幸福になるやうに、各が善くなるやうにそれ〳〵適當な道を教へるといふことをしなければならぬ。差別無しに平等の慈悲といふものは行はれるものではない。平等にばかり偏するならば、それは惡平等、空想に終つてしまふ。差別にばかり偏するならば爭ひが起る。『奪はずんば饜かず』と支那の孟子が言つたやうに、お互に爭つて、お互に奪合ひをしなければ治りがつかないことになつてしまふ。

それで空といふ平等觀を以て總てを根柢から察して、それから假といふ差別觀を考へて、然る後にこれを經める統一觀に行くのであります。『差別の無い平等なものから、いろ〳〵な差別が出來て來るぞ』また『いろ〳〵な異つて居る中を通じて見れば異はないものがあるぞ』斯ういふやうにして二つのものを經めて考へる、これを『中』といふ。中道を外れてはいけない、むやみに『平等々々』と言つて居るものは偏つて居る、むやみに『異ふ〳〵』と言つて居るのも偏つて居る。異ふところは異ふところとして、確かりと見極める、異はない性質のものは異はない所を確かりと見極める。さうしてこれを統一して經めて人生觀を立てる。子供に對する親の態度でもさうです。國家に對する國民の態度でもさうです。同じ所もあるし異ふ所もある。それをスッカリ經めて、さうして右にも偏らず、左にも偏らないといふやうな本當の道を選んで行くといふことが大事であります。

その空と假と中とその三つのものゝ見方に於て誤りの無いのを知見波羅蜜と言ふ。本當に物を見る力その力に依つて迷ひといふものが無くなつて行くのであります。

佛樣はさういふものを皆具足して、そなへて居らつしやる。それだから佛は一切の人に對して皆同じやうに可愛がつてやるけれども、その人間に對して程度に應じてそれ〳〵適當な教を說いて行く。それ

が所謂方便です。方便を以て教を説いて、さうして大勢の人間を救ふことが出來るといふのであります。

此處で『佛と成れば皆それである』と言つて佛をむやみに讃めてお述べになつて居りますのは、後に行つて『お前達もさう成れるぞ』といふことを言はれる爲です。ですからお經を半分讀んではいけないと言ふのはそれです、此處だけ讀んで居ると、何だか吾々とは縁の無いことを言つて居るやうです、佛樣といふものは非常に偉いものだ、佛樣といふものはお前達とは段が違ふぞといふことを頻りに説いて居る。ところが後になりますと、そんなに偉い佛樣にお前達凡夫が修行次第で成れるのだから、一つ奮發しなければいかぬぢやないか、斯ういふ教が説かれる。それであるから經典を半分讀んで批評するといふことはいけない。西洋の人などが佛教の批評をするのに、いつでもそれで縮尻つて居る。終ひまで讀まなければ本當の意味はわかるものではない。どうか皆樣もお讀みになるならば、通して讀んでその精神の在る所を捉へるやうにして戴きたいと思ひます。半分ではわかるものではない。私は新宿の向ふの笹塚に住んで居りますが、邊鄙な所ですから碌なものはありはしませぬ。お客があると接待に困る。十二時頃になつて『どうもこの邊は田舍ですから碌な物はありませぬ』と言つて言ひ譯をする。言ひ譯をするのは何も食はせない積りではない。碌な物が無いから言ひ譯をするけれども、正午になつたからお腹塞ぎぐらゐの事は致しませうといふ積りです。それを皆聽いて呉れゝば宜いけれども、『この邊は田舍ですから碌な物はありません…』それだけ聽いて『それでは左樣なら』と言つて歸つてしまはれては困る。すべてがそれでありまして、半分ではいけない。經典を讀みながら半分讀んで批評してはいけない。『佛教にはこんな事がある、これは不埒だ』などゝ言ふのは、大抵半分だけ讀んで居る。全體を通じて讀まなければ精神の在る所はわからない。

それでこの所は佛樣を無暗に讃めて居ります。だから舍利弗が不思議を起して、何だつてお釋迦樣はそんなに自分の事ばかり言つて居るのだらう佛は偉い、佛は偉いと言つて、佛の偉い事ばかり言つて居らつしやるが、一體これはどうなるだらうといつて不思議を起した。そこでその不思議を起すのを俟つて、お釋迦樣が『イヤ佛の事を言ふのではない、お前達の事を言ふのだ、お前達凡夫と雖も修行して行けば、今まで讃めたやうな佛の境界に成れるのだから、お前達の毎日の行ひを確かりやつて行け』といふことになつて落着くのであります。どうか終ひまで讀んでその精神の存る所を捉へるやうにして戴きたいと思ひます。實は一度にズット讀めばさういふ所が能くわかるのでありますけれども、だん〳〵難しい言葉も出て來ますし、一度になか〳〵要領を得ることは出來ませぬから、少しづゝ言葉を説明して居る譯であります。何回か話した事を纏めてお聽き下さつたら、その精神の存る所がおわかりになるだらうと思ひます。今日はそれ迄に致します。

（第十七講了）

近刊

法華經講話　第三輯

定價　金五拾錢
送料　金六錢

本月中旬出來の豫定

申込所　財團法人　統一閣

振替口座　東京九四二〇番
電話　千住五三三六番

○第一輯賣切　第二輯殘本少數

（○）記事（○）

矢野　茂翁追悼會

先月のお彼岸中に欽然として矢野翁の逝かれたことに對して、吾等同信の友、殊には山田博士、小林先生や石橋中將等一層切實に故人を偲ばれて、聊か追憶の赤誠を致さうではないかといふところから、井村日咸、井上敬次郎、石橋甫、磯部滿事、岩野直英、林賴三郎、高橋義章、高島平三郎、山田三良、山田日眞、山田英二、小林一郎、佐藤鐵太郎、佐藤梅太郎、三吉顯隆、守屋貫教等の各位發起人となり、四月十九日本部會館で御遺族を御招待申上げて莊嚴なる法要と二三同志のなつかしい追憶談があつた。

法要導師に就て井村大僧正が勿論勤めらるゝ事と思つてゐた處、先約あつて作遺憾続出との旨を報ぜられ、其他顯本系の最高幹部僧員は御緣故の薄い爲めか姿を見せられず、却て日蓮宗神保管長、酒井大僧正、田中先生等が禮儀を盡されてゐた。日蓮聖人の御書に「一死一生知二交情一」げにも生きたる時の情は互の事なれば還て我が爲なり只なき跡のとふらひこそ實の志なれ、然るに生たる時は親しみ昵びて死にはつれば思ひも出さず、さして弔ふ事なからんは更に人倫と云ふべき樣無しと云云と追善の肝要を敎へられたことに胸も轟ろく。今日は人の上、明日は我身の上であらう。

午後五時十五分三吉僧正大導師となつて妙なる奏樂先づ人々の心身を清めやがて朗々たる讀經唱題に滿堂の熱誠籠つた御回向に、奉安された矢野翁の御肖像も動き出したかにも感ぜられた。貴しゝ々。

六時より追憶談に入る。迭々錄倉より御參詣下さつた山川智應博士、時間の都合上最初に起たれて、矢野翁求道の誠意に於て一宗一派の執はれた派別觀念がなく、よく國柱會にも來られて純なる、それこそ一途に日蓮聖人を慕はれた其の態度がよく姿の上に表現されてゐたことを身振りで示されたりして翁の德を稱へられた。山田博士は明日御渡韓なさるお忙しい中をこの爲めにお繰合せ頂いたものであらうと拜察し、一言御感想を承つて早くお歸り頂けばと存じたが、温情溢るゝ慈顏を以て、翁が二十餘年來法華會の幹事として道の爲めにお盡し下された事や、其他忍苦の尊い御起居に就て話された、岩野少將は私的交情の濃かであつた二三特長を述べられ、小林先生は涙を以て翁の德を讃歎されて報恩の一端に擬したいと結ばれ、高橋中將は翁に依つてこの道に誘導された恩義を縷々述べて感謝を表せられ。最後に山田上人の天晴會時代からの懷舊談に華咲き情緒をそゝるものがあつた。其他翁の美點長所に對するかくれたるお話を來會の方々にお述べ頂かうと思つたが、時間も迅く八時を過ぎ、千葉や錄倉其他遠方の方々も多いからして一時つきぬ名殘を留めて閉會とし、念がぬ者は御自由にして散いた。來會者約七十、佐藤鐵太郎中將は御旅行中で、參詣の出來ないことを非常に遺憾とせられ、代つて御挨拶するやうとのことであつた。井上敬次郎氏は法要のみで先約の爲に不得止中座された。悲しかるべき集合にも不拘、春の如き雰圍氣の溢れてゐたのは、偏へに翁の御臨終の美はしいからであつた爲めではなからうかと拜察した。

當日御遺族から、翁の遺志だと仰せられて本會へ金一封御寄贈あつた事を茲に感謝して筆を擱く。

本部敎報

法華經講座　毎週木曜日晩七時より一時間半小林先生の御講筵は連續されて、一同法味に浴しつゝある。目下法華功德品で、これより氣温も申分ない佳節に際會する故、同信の御來聽を爲道に切望する。

日曜日集會　四月七日の日曜日に、釋尊の御降誕慶讃法筵を催した。而して故國友上人の第八回忌追善供養を沼部彌太郎氏志主となつて營まれた。法話は、

御降誕を慶讃し奉る　磯部滿事氏
御降誕と宗祖の御德　梶木顯正師

同　十四日　この日は法華講話會として、山口智光師により二時間の動行を修した。而して白井勢市氏施主で、未亡人の第七回忌追福を營まれた。

同　二十一日　午後二時より四時半まで修法と講話を同催した。

導　師　小西日喜師
信の立場に就て　中村清一氏

横濱敎誌

當地、三月の集りは次の如くであつた。

三月二日　夜、中區榎町宮本氏方にて、「人としての自覺」磯部先生。

同　四日　夜、神奈川區篠原町佐藤氏方にて、「信師と惡師」磯部先生。

同　十日　夜、中區千歲町青柳氏方にて、「內典の孝經」磯部先生。

同　十二日　夜、神奈川區鶴屋町京田氏方にて。

同　十三日　夜、中區海町長久保氏方にて「正師に就て」磯部先生。

同　二十四日　夜、磯子町稻葉氏方にて、「佛樣の大恩」磯部先生。

同　二十六日　物故會員佐藤ちよ子氏の一週忌に相當したので、有志十餘名、杉田の妙法寺へ墓參、同向した。

同　日　夜、中區南太田の川又氏方にて、「信仰と病難」磯部先生。

同　二十七日　夜、神奈川區三ツ澤の齋藤氏方にて、小西師の御法話。

二本松敎信

三月　七日　午後九時二分二本松驛通過にて旭川師團凱旋部隊野砲兵第七聯隊原隊に歸る因つて歡送す。

同　日　午後十時五十七分二本松驛通過にて歩兵第十四旅團司令部、歩

兵第廿八聯隊凱旋す因つて歡送す。

同　八　日　午後九時二分富驛通過にて、野砲兵第七聯隊の一部凱旋す因つて歡歡送す。

同　　日　午後十時五十七分富驛通過にて歩兵第廿七聯隊凱旋す因つて歡送す。

同　十五日　二本松佛教不染會托鉢修行。

同　十六日　夜於蓮華寺題目講並に聖應院日生上人五周年忌祥月命日法要修行。

同　十七日　午後九時二分富驛通過にて師團司令部、騎兵第七聯隊凱旋す因つて歡送す。

同　　日　午後十時五十七分富驛通過にて歩兵第廿六聯隊凱旋す因つて歡送す。

同　十九日　午後一時五十七分富驛通過にて戰死者遺骨五基郷里に歸る因つて尚迎ひ讃經す。

同　　日　夜蓮華寺涅槃會並に宗祖降誕會修行。

同　廿六日　福島市公會堂に於ける社會事業協會總會に出席す。

同　廿九日　東京市日比谷公會堂に於ける全國私設社會事業統制協議會に出席す。

同　卅　日　

同　卅一日　

四月　一日　夜於蓮華寺開山忌修行。

統一團員　大阪

鷲田重正氏の美擧

今年は大阪の鷲田重正氏の家では、祖祖母の五十年に祖父母の十七年と十三年それに親父の十七年、と云つた大法事に當つてゐるので、何か有意義な追善供養をしたいと本年正月から伯父に當る東京の鷲田平三氏と相談の結果、梶木顯正師の盡力で日蓮宗の布教班を煩はし、追善供養と非常時克伏の教化運動で郷里東田中を中心に福井縣丹生郡を一巡する事になつた。それには日蓮大聖人御一代記活動寫眞を映寫して國民元氣の復活を計るが第一なりと、去る三月廿四日から廿八日まで五日間映寫班を組織して同地方を左の如く巡廻至る處非常な感會裡に一般地方民の非常時意識を深めて有意義に終了、廿九日祖先の菩參を濟ませられて歸阪された、概況左の如し

第一日　三月廿四日午後七時半より

非常時克伏大日蓮映寫會開催

會場　福井縣丹生郡朝日村東田中

於　逢士仁右衛門氏宅

會場逢士仁右衛門氏は眞宗の家で現在村長として居られる爲め非常に多忙にも拘はらず「先祖の供養と教化運動」といふ全くの精神的事業だけに一段と感激されて自己の宗派的感情を超越お宅を開放下さつた、のみならず映寫會開催の手續等色々と御援助を頂いた由何しろ百餘軒の村落に法華宗が四軒しか無いと云ふのに四百餘人の來會者を見た上に、梶木顯正師の講話があつたが一同拍手喝采の感激ぶりなんだから効果も相當考へられるだらう、（閉會に際して高木政子夫人の御禮の挨拶があつた）。

第二日　同廿五日午後七時半より

同　大日蓮映寫會開催

梶木顯正師の挨拶に次で小前田先生の挨拶

會場　同　同　西田中

於　高等小學校講堂

來會者二千餘名の處會場入り切れないで溢つた者も多數あつた樣子、此處も日蓮宗は極めて少い土地だが廣告が行き屆いた故かよく集まつたのには驚いた、校長先生を始め職員方が後の掃除まで手傳つて下さつたのには主催者一同感激してゐた。

第三日　同廿六日午後七時半より

同　大日蓮映寫會開催

梶木顯正師講話

會場　同　同　於　志津村山内本行寺

來會者四百餘名、藤上人の閉會の辭に終つたのは十一時過であつた。

第四日　同廿七日午後七時半より

同　大日蓮映寫會開催

梶木顯正師挨拶

會場　同　同　於　綾田村山中蓮成寺

來會者四百餘名、此處は林慈治氏の主催で氏は本年父の卅三回忌と兄上の三回忌追善の爲に開會希望で催されたのである。土地の人達は遠く親類へハガキで見に來るやう案内してゐたと云ふから當日はかなり遠方から泊りがけで來親された模樣であつた。たい遺憾であつた事は電力が少なかつた爲に伴奏が尚來なかつたこと、説明の宗會師が風邪を引いて發熱した爲に代つて梶木師がナレナイ説明であつた爲に大聖人映畫の眞價を紹介出來なかつた事が殘念であつた。

第五日　同廿八日午後七時半より

同　大日蓮映畫會開催

梶木顯正師講話

會場　同　足羽郡社村南居

於　妙正寺

來會者四百餘名、住職兒玉師の閉會之辭に終つたのは十一時を過ぎてゐた。

連日の延べ人員三千六百有餘人、この喜んで頂いた上に更に邦家の非常時意識を幾分でも深め得た功德を故先祖諸精靈に御回向した事は主催者の方々も感激してゐる。猶機械の方を受け持つた望月隆證師、説明を受け持つて下すつた宗會師等の連日の御奮闘は万々深謝に堪へない、と共に一行の宿から種々開會の準備等前後お世話を下さつた田中の鷲田七五三造氏、笠原繁之助氏、外親戚の方々、寶泉寺の森下定右衛門氏親子の方々、山内の淺邊忠右衛門氏並市郎右衛門氏、山中の林多左衛門氏、南居の横山六三郎氏等、心からの御歡待御盡力万々感謝申上げて文は意を盡しませんが一行を代表して御禮を申上げます。

猶五月に亘つて梶木師著「大なる誠日本精神」を六百部施本された。（四、三、報）

寄附金維持及團費誌料領收

（自三月二十一日
至四月二十日）

一金貳圓五拾錢也　神戸　斉藤　英一殿
一金　参　圓　也　千葉縣　藤崎喜三郎殿
一金　六拾　圓　也　横濱　中村清兵衛殿
一金貳圓貳拾錢也　奉天　三浦　静子殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　藤崎勘三郎殿
一金七拾貳錢也　大阪山乃神修道園殿
一金貳圓五拾錢也　東京　大辻松太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　澤田真蓄穂殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　岩崎大次郎殿
一金壹圓[illegible]　[illegible]　高田　[illegible]殿
一金貳[illegible]

[illegible]殿
一金貳圓貳拾錢也　松浪たま子殿
一金貳圓五拾錢也　田村　儀作殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　川村　善助殿
一金貳圓五拾錢也　弘前　竹内　軌榮殿
一金貳圓五拾錢也　東京　水野　正雄殿
一金　貳　圓　也　同　沼部彌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　松川嶋太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　東山荷[illegible]殿

一金　参　圓　也　東京　古澤　たみ殿
一金貳圓五拾錢也　小田原　中村　銀藏殿
一金貳圓五拾錢也　東京　黒須源太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　大多和たけ子殿
一金　五　圓　也　大阪　鈴木　浮藏殿
一金壹圓貳拾錢也　山口縣　野上　雷藏殿
一金参圓六拾錢也　大阪　吉永　日洋殿
一金貳圓五拾錢也　鳥取　中山　義司殿
一金貳圓貳拾錢也　静岡縣　桑原　城有殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　村山　智全殿
一金貳圓五拾錢也　同　[illegible]橋　大吉殿
一金　拾　圓　也　東京　井上道太郎殿
一金　拾　圓　也　同　柴田　武治殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　遠藤　實照殿
一金貳圓貳拾錢也　西宮　山本小四郎殿
一金　参　圓　也　茨城縣　下條　惠教殿
一金　六　圓　也　東京　中村のぶ子殿
一金貳圓五拾錢也　山口　野北　祐次殿
一金壹百　圓　也　東京　矢野　恕殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　三城　房吉殿
一金　五　圓　也　横濱　小泉　文柄殿

右謹有入候仕候也

財團法人統一團會計

念告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清授相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み愛に本團は先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逞り申候に付本誌卷頭略則御諒承の上爲法國爲一切衆生可相成團員として何卒御賛助あらんことを偏に奉祈願候

財團法人　統一團

本多日生上人著書特價提供

聖語錄　改版　特價　送料共　金壹圓八拾錢
法華經要義　踊天覽　仝　仝　金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓　仝　仝　金壹圓五拾錢
日蓮主義精要　仝　仝　金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價値　仝　仝　金貳拾五錢
仝　仝　金五拾錢
仝　仝　金參圓廿五錢
仝　仝　金拾錢

謹繼
日生上人
勤行作法　特價　送料共　金壹圓七拾錢
仝　金拾錢

河合陟明著
皇道と日蓮主義　定價　送料共　金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人　統一團出版部
振替東京九四二〇番

月刊「教」誌
定價一冊　送料共　金拾錢
一ヶ年前金　送料共　金五圓
金壹圓貳拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年　金貳圓貳拾錢

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十年四月廿四日　印刷納本
昭和十年五月一日　發行
（第四百八十二號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話[illegible]

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

釋尊の降誕を慶讃して（其三）……日生上人
本尊講草（承前）……故野口日主師
人生と學生時代……小林きくみ
法華經講話（第十八講）……小林一郎
記事
○本部團報各地教信　○『皇道と日蓮主義』に對する世評
○寄附團費誌料領收　○新刊紹介

第四十年　六月號